English Intelligence

著者紹介

ATSU

オーストラリア国立大学会計学修士を成績優秀で修了した後、オーストラリア、メルボルンにて世界4 大会計事務所の一つ Deloitte トーマツに入社。アメリカ、イギリス、日系など幅広いグローバル監査案件に従事し、多様な会計実務経験を蓄積。同社クライアントマネージャーを経て、登録者数 40 万人を超える YouTube チャンネルを軸とした英語学習メディア Atsueigo をプラットフォームとし、合同会社 Westway を設立して独立。著書に Distinction I、II、III、VOCABULARIST、Distinction 2000、パラフレ英会話 がある。

IELTS Academic 8.5、実用英語技能検定１級 、TOEIC 990点満点、TOEIC SW 400点満点、Versant 80点満点、TOEFL iBT 114点、元米国公認会計士・豪州勅許会計士、オーストラリア永住権保持。

発音マスタークラス

発音学習に必要なすべての知識を、たった一つの動画コースで。発音の専門的な知識を、日本人学習者の視点から体系的に、分かりやすく解説。そして、その知識をネイティブが実践的に、楽しく、モチベーショナルに展開。
発音のすべてが、一つの動画講座で分かります。

Vocabularist

ATSUが本気で英語に取り組みたい人へ向けて書き上げた、英単語学習本の決定版。すべてのアクションに明確な理由があるため、圧倒的な納得感と共に語彙学習を進めることができます。

Distinction

ATSUがネイティブとのギャップを埋めるために企画考案。これまで豊富な海外経験を通して蓄積してきた「日本では出会わないが英語圏では日常的によく使われる単語・表現」を、複数人のネイティブと協働して厳選収録した史上最高の英単語帳。語源や由来、音の変化・脱落を考慮した発音記号、実用的な例文、暗記時に例文と意味が見えない配置、完全にネイティブスピードの音声、外から見たときにクールなデザインなど、コンテンツからカバーまですべてにとことんこだわった自信作です。

Chapter 01 English Intelligence（＝英語思考力）を理解する

1.1 English Intelligence を定義する 02
1.2 なぜ English Intelligence が重要なのか 03
1.2.1 良質な英語学習教材 04
1.2.2 継続的実行力 04
1.2.3 最適な英語学習方法 05
1.3 なぜその学習を行っているのか理解していますか？ 07

Chapter 02 English Intelligence を高める―英語の本質に迫る

2.1 英語を構成する3 つの知識とは 11
2.1.1 単語知識 12
2.1.1.1 英単語は英語を構成する最小単位 12
2.1.1.2 英語に意味を与える要素 13
2.1.1.3 単語知識に含まれるもの 14
2.1.2 文法知識 16
2.1.3 発音知識 18
2.2 3つ知識習得に必要な学習量 19
2.2.1 英単語学習の効率化が英語学習全体の効率化に繋がる 20
2.2.2 英文法・発音を完成させ、英語学習の整理に繋げる 21

Chapter 03 English Intelligence を高める―英語の運用プロセスを徹底分析

3.1	英語を運用するとは	23
3.2	英語の運用プロセスを分析する	24
3.2.1	リーディング分析	24
3.2.2	リスニング分析	26
3.2.3	ライティング分析	28
3.2.4	スピーキング分析	29
3.3	分析から導かれた運用能力向上に必要な4つの能力	30
3.4	意味取り能力	32
3.4.1	意味取りに必要な知識	32
3.4.2	意味取り能力を高める方法	34
3.5	文章構築能力	36
3.5.1	文章構築に必要な知識	36
3.5.2	文章構築能力を高める方法	36
3.5.3	言いたいことを時間をかけてでも文章化してみる	37
3.5.4	「感覚」を心の中にイメージして何度も言ってみる	38
3.6	聞き取りと発音能力	39
3.6.1	聞き取りと発音能力を高める方法	40
3.6.2	発音知識を習得し、自分のスピーキングに落とし込む	40
3.6.3	聞き取れない部分の識別・原因分析・解決	41
3.6.4	精聴から得た新しい知識をスピーキングに落とし込む	41

Chapter 04 English Intelligence を高める―最高の英語学習方法を求めて

4.1	必要知識による分析	43
4.2	インプットとアウトプットによる分析	44
4.3	瞬発力による分析	45
4.4	英語レベルによる分析	46
4.5	分析結果の考察	47
4.5.1	導かれる仮説	47
4.5.2	筆者の経験をベースとした仮説の検証	48
4.6	導かれる最高の英語学習戦略とは	50
	あとがき	51

Chapter 01

English Intelligence（＝英語思考力）を理解する

英語学習を10年以上前に開始。日本で生まれ育った私は、大学受験英語をきっかけに英語学習を始めました。最初は当然英語を全く使えない状態からのスタートでしたが、その後様々な試行錯誤を経て英語力を伸ばし、海外大学院、最終的にはオーストラリアにて世界四大会計事務所にて会計士としてのキャリアを築くにまで至りました。この長い道のりの中では「どうしてこんなに勉強したのに、全然効果が出ないのだろう…」と思うこともしばしばありました。しかしそんな中、自暴自棄に陥らず、たくさんの壁を打ち破り、常に自信をもって効率的・効果的に学習を継続できたのは、「なぜ英語が伸びないか」を常に徹底的に分析し、その解決策を見つけることができたからです。このプロセスを繰り返すことで、どんな困難な状況でも、正しい問題の分析と解決策の立案を行えば必ず英語を伸ばすことができるという確信を得ました。このスキルを本書ではEnglish Intelligence（＝英語思考力）と呼びます。Atsueigoを設立し、様々な活動を通して数多くの英語学習者に出会いました。その中で強く感じるのは、みな英語力を身に着けるための高いポテンシャルがあるにもかかわらず、このEnglish Intelligenceが身についていないために、費やした時間に見合った英語力を手にしていないということです。English Intelligenceは、学歴や偏差値、現在の英語力に関係なく誰でも身に着けることが可能です。そこで今回は、みなさんのEnglish Intelligenceを高めることを少しでもお手伝いしたいと考え、本書を著すにいたりました。みなさんの英語学習がより効果的・効率的になるよう、英語学習の本質に迫っていきたいと思います。ぜひ最後までお付き合いください。

English Intelligence

1.1 English Intelligence を定義する

英語学習の中で立ちはだかる多くの壁。それにぶつかるたびに「もう英語の勉強をやめたい！」と思ってしまう方も少なくないのではないでしょうか。実は私もそうでした。日本国内で独り、コツコツと英語学習を進めていく中で「もうこれ以上独学じゃ伸びないんじゃないか」「やっぱり留学しないと英語は無理なんじゃないか」と自分の英語力を環境のせいにしたくなる時期もありました。しかし、そんな中多くの時間を現状分析に費やし、解決策を導き、何度も繰り返し実行することで、そうではないと気づきました。冒頭でもお話したように、English Intelligence を根気強く磨けば、どんな難しい状況でも、英語学習を前向きに、そして自信を持って進め、確実に結果を出すことができるのです。ここで一度、今回のトピックであるEnglish Intelligenceについて、より具体的に定義づけを行いたいと思います。English Intelligence、それは「英語学習において直面した問題に対して、自らが現状を分析し、論理的に解を導き実行することで英語学習を効果的かつ効率的に進めるスキル」を意味します。この定義で最も重要なのは「自らが」現状分析、解決策の立案・実行を行っているということです。自分で何も考えず、いつも誰かにアドバイスをもらわないと学習を進めることができない状態からの脱却を図っているということが、この定義に表れています。これまで YouTube チャンネルや公式サイトを通じて多くの英語学習方法や理論について解説してきましたが、最終的には学習者一人一人が自分の頭で考え、前に進む力を手に入れることを理想としています。次項からは、どうしてこのスキルが英語力を高める上で重要なのかについての理解を一層深めると同時に、English Intelligence の具体例についてお話することで、これがどのようなスキルなのか、イメージをより明確にしていこうと思います。

1.2 なぜEnglish Intelligence が重要なのか

前項では、English Intelligenceを英語学習において直面した問題に対して、自らが現状を分析し、論理的に解を導き、実行することで英語学習を効果的かつ効率的に進めるスキルと定義しました。このEnglish Intelligenceをどう伸ばすかについてお話する前に、そもそもどうしてEnglish Intelligenceが英語学習において重要なのかについて、もう少し詳しくお話いたします。

English Intelligence の重要性を理解するためには、そもそも英語力の成長には一体何が必要なのかを明確にする必要があります。私が考える英語力の成長に必要な要素は

1.) 良質な英語学習教材

2.) 継続的実行力

3.) 最適な英語学習方法

の3つです。一つ一つ詳しく見ていきましょう。

—1.2.1 良質な英語学習教材

1つ目の重要な要素は「良質な英語学習教材」です。基本的に英語学習をするには英語学習をするための教材が必要になります。例えば、英単語を覚えるという行為を考えたときには、多くの場合英単語帳という英語学習教材を使うことになります。英文法であれば、英文法書を使い学習を進めることがほとんどなのではないでしょうか。もちろん、映画やドラマ、YouTube動画なども、学習に適した要素が含まれていれば英語学習教材と考えることができます。このように、英語学習の始点は、英語学習教材です。そして、この英語学習教材に含まれている内容は、今後みなさんが築き上げる英語の血となり、肉となります。今使用している単語帳に含まれている英単語は、今後みなさんが話したり、書いたり、もしくは思考する際にみなさん自身の言葉として姿を現す単語となるのです。そう考えると、この英語学習教材に含まれる内容が不明確だったり、自分の英語に組み込むために必要な情報が十分に揃っていなかったりすると、当然それは自分の英語力を築く上で大きな弊害となってしまう可能性があります。従って、教材選びは必ず慎重に行いましょう。Atsueigo の公式サイトやSNSでの評判などをリサーチすれば、教材選びに必要な情報は十分手に入ります。選んだ教材の内容がそのまま将来自分の英語になるという意識をしっかり持ち、教材選びを行いましょう。

—1.2.2 継続的実行力

英語力の成長に必要な2つ目の要素が「継続的実行力」です。先ほど、1つ目に重要な要素として良質な英語学習教材を挙げましたが、当然、ただ教材を購入しただけで英語力が手に入るほど英語学習は甘くはありません。手にした良質な英語教材を使用して、学習を継続して初めて、その教材の内容が少しずつ自分の英語力として育っていくのです。よく「教材を買って1週間やったが、何の効果も得られなかった」というような話を耳にすることがありますが、それはこの継続的実行力を欠いている典型例です。「継続は力なり」ということわざがありますが、この言葉は英語学習においてもピタリと当てはまります。

では、この継続的実行力はどうすれば身につくのか。本書ではあまり詳しくお話しませんが、継続的実行力の裏側には、将来本当になりたい自己像を具体的に思い描くことで得られる強いモチベーションと、成功体験の積み重ねによって得られる自信が存在します。私が英語学習をコツコツと継続できたのも、常に「英検1級に合格した自分」のような短期的な自己像や「将来海外で英語を使って会計士として働く」といった長期的な自己像を具体的にイメージしていたことが、自分を鼓舞するモチベーションに繋がったからです。短期目標の達成という成功体験を積み重ねることで自信がつき、より高い次元を目指したいと思いが

モチベーションとなり、学習を継続することができました。このように、英語力を成長させるには、途中で諦めたり、投げ出したりせずに、強い気持ちと高いモチベーションをもって英語学習を進める必要があります。

—1.2.3 英語学習メソッド

英語力を成長させる上で重要な3つ目の要素は、「最適な英語学習方法」です。ここまで、英語学習の始点は良質な英語学習教材であり、その内容をしっかりと理解し、暗記し、使えるようにするためには、継続的な学習が重要だという話をしました。しかし、残念ながらいくら優れた英語学習教材を長い時間・期間かけて習得しようとしても、思ったような効果が必ずしも得られるわけではないのです。なぜでしょうか。それは、その教材に含まれている内容を自分のものにするために実行している英語学習方法が、最適なものではない場合があるからです。この英語学習方法が最適なものでなければ、英語力の習得に必要以上の時間がかかったり、期待した効果が得られなかったりすることになります。より具体的に理解するために、単語帳を使って単語学習を始めた学習者のケースを例に見てみましょう。

名前：英太さん
単語帳に含まれる単語数：4000 語
1 日の勉強時間：5 時間

認識している問題：英語学習には十分に時間をかけ、色々な方法を試していますが、1冊を覚えるのにかなり時間がかかります。また、いくら単語を覚えても、中々使えるようになりません。

どうやって単語学習を行っていますか？：しっかりと覚えるために、一語一語丁寧に時間をかけて行っています。大体平均して、1語当たり5分かけて勉強しています。覚え方はとにかく書く。発音記号については、今は効率が悪いと判断して無視しています。また、日本語で4つ、5つ意味があるものや、派生語や類義語があるものもあるので、5分以上かけて単語を覚えることもよくあります。また類義語等で意味の分からないことがある時は、必ず電子辞書で調べて、その意味を書き込んでいます。その時にニュアンスの違いが気になる時はしっかり調べて、書き込んでいます。調べ作業では納得いくまで調べるので、一回に2〜30分かかることもありますが、将来良い結果につながると思い継続しています。また、覚えにくい単語には、語呂合わせを作っています。例えばtiny（小さい）という単語は「タイにいったら小さいお店があった」と覚えました。こうすると頭に残りやすくて効果的だと実感しました。

いかがでしたか？英太さんの英単語学習法をみて、どう感じましたか？英太さんは1日5時間という十分な時間を確保し、英語学習も様々な方法

で覚えようとモチベーション高く努力している様子が伺えます。しかし、Atsueigoの英単語学習理論、学習方法を見たことがある方はすぐに分かると思いますが、英太さんの英語学習方法は非効果的かつ非効率的な学習方法であると言わざるを得ません。

1.) 1 語あたり5 分以上かけている→一語最高でも1.5 分
2.) 書いて覚えている→音で覚える
3.) 発音記号を無視している→発音記号で覚える
4.) 全ての日本語訳を覚えている→複数の意味のコアイメージが重要
5.) 語呂合わせを使っている→英語を英語で考えるという概念を無視している

等々、改善すべき点が山ほど思い浮かびます。そして、こうした英語学習を大真面目に、毎日大量の時間をかけて行っている方は実際にたくさんいるのです（このやり方で英語力が全く伸びないと言っているわけではなく、もっとより良い方法があると言っていることに注意してください）。これまで Atsueigoの活動を通して、たくさんこのような学習を実践している方に出会いました。そしてその度に改善を提案し、多くの方が英語学習の効果・効率が改善して英語力が劇的にアップしています。こうした経験を通して強く感じるのは、多くの英語学習者が、英語を伸ばすために必要な力は十分にあるにもかかわらず、最適な英語学習メソッドを採用しないがために、結果が出ず、最悪の場合、英語学習をやめてしまうことさえある、ということです。

もう既にお気づきかもしれませんが、この3つ目の「最適な英語学習方法」こそが、英語学習においてEnglish Intelligenceが必要な最大の理由です。しつこいようですが、English Intelligenceというのは英語学習において直面した問題に対して、自らが現状を分析し、論理的に解を導き、実行することで英語学習を効果的かつ効率的に進めるスキルです。つまり、English Intelligenceを鍛えれば、先ほどのケースの英太さんのような状況に陥らないだけではなく、常に自信を持って、最適な学習方法を通して英語力を伸ばすことができるのです。

Three elements of Growth | 英語力成長の3要素

効率的・効果的な学習方法

例 **最重要**

問題: リスニングが苦手
解決策: シャドーイング

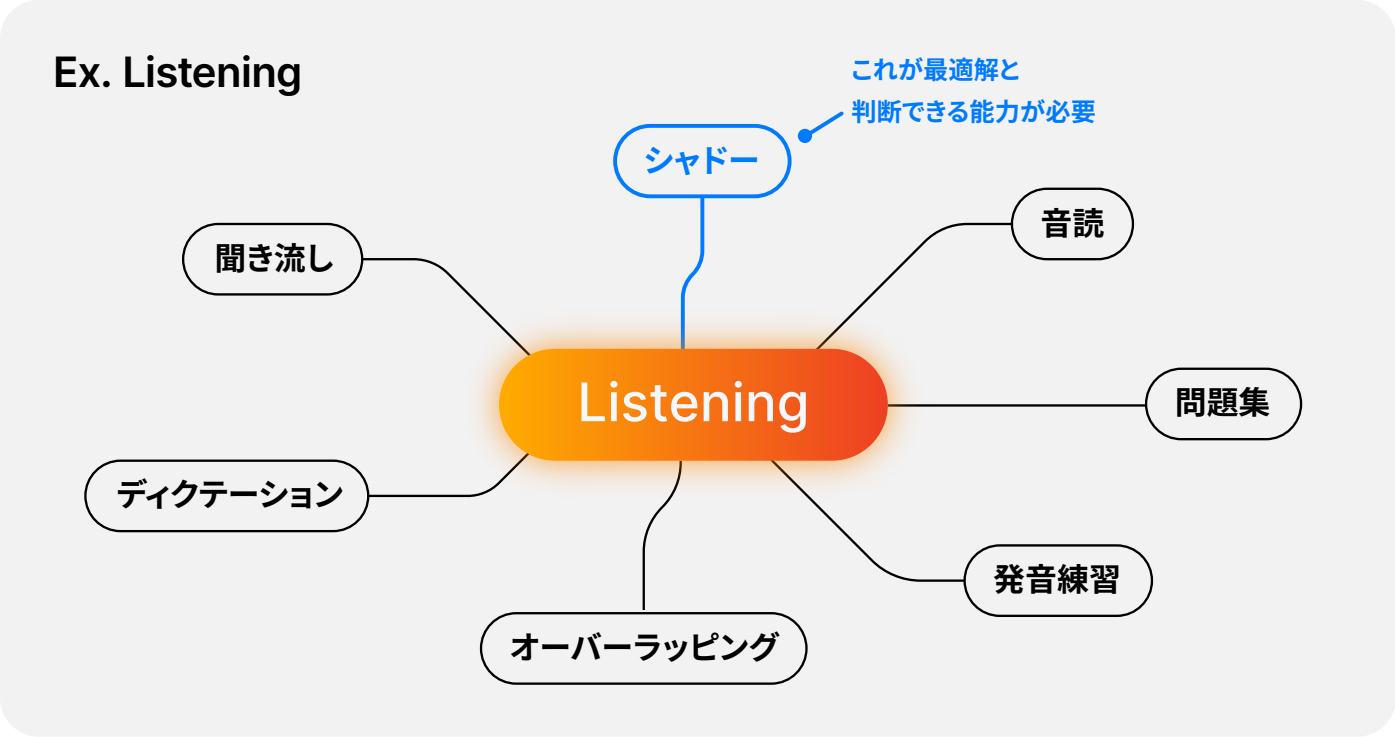
本当にシャドーイングが自分にとって最適解なのか?

1.3 なぜその学習を行っているのか理解していますか?

English Intelligenceがどうして英語学習において重要なのか理解できたところで、次はEnglish Intelligenceが一体どのようなスキルなのかより具体的にイメージできるように、また例を使って解説していきます。今回は英語学習者の中でも困っている人が多いであろうリスニング学習のケースを例にとり、考えていきましょう。以下のケースを見てみましょう。

名前:リス子さん
問題:TOEIC のリスニング問題で点数が取れない

どうやってリスニング学習を行っていますか?:今は毎日とにかくシャドーイングを行っています。大体1日3時間くらいはシャドーイングしており、声もカラカラになるくらい行っています。前はディクテーション(書き取り)が良いとどこかのサイトで見たので、ディクテーションをたくさん行っていたのですが、中々効果が出ず、困っていました。でも、Atsueigoのサイトでシャドーイングがおすすめという記事を見たので、それからとにかくコツコツシャドーイングをしています。一応今はリスニングで聞こえる単語はほとんど聞き取れるのですが、「結局どういう意味?」と思ってしまうことが多いです。そしてそんなことを考えているうちにリスニングは進んでいってしまうので、それで聞き落としてしまうこともよくあります。しかし、だからと言って意味を考えないと当然問題も解けないですし、ちょっとどうすれば良いのかわからない感じもあります。でも、やはりシャドーイングがおすすめなようなので、これでいつか意味もわかるようになるということを信じて、とにかくやり続けてみようと思います。



リス子さんのケースをみてどのように感じましたか？リス子さんは英太さんと同じように、毎日しっかりと学習時間も確保していますし、高いモチベーションを維持して努力しているようです。しかし、英語学習において重要な要素が欠けています。リス子さんはリスニングができないことを問題として認識しており、その解決方法としてシャドーイングを選択しています。しかし、なぜシャドーイングを選択したのかという理由が明確ではありません。リスニングの学習方法はシャドーイングだけではありません。リスニングの英語学習方法にどんなものがあるか検索するだけでも、聞き流し、ディクテーション、オーバーラッピング、音読などなど、数多くの学習方法が存在しているはずです。そんな中、どうしてシャドーイングが自分の問題を解決する上で最適な方法なのか、ここに対する思考が抜けているのです。シャドーイングをずっと何時間もかけて行っていれば、当然リスニングの力は伸びていきます。しかし、もし仮に短期間で、もっと飛躍的な効果を生む学習方法が存在していたのであれば、それを選択すべきだったということになります。

ちなみに今回のケースでリス子さんは「単語はほとんど聞き取れるのですが...」と言っていますね。つまりリス子さんは英語を聞き取ることは出来ており、出来ていないのは英語の意味を取ることなのです。そして、シャドーイングというのは聞こえたことを一語一語口でコピーして言うことにより聞き取れているかを確認し、聞き取れていない原因を分析し解決する作業なので、学習方法が解決しようとしている問題（聞き取り）と、リス子さんが解決しようとしている問題（意味取り）がズレています。言い換えれば、手段と目的が一致していません。意味取りには、意味取り能力を高めるための英語学習方法を採用する必要があるのです。

本章ではEnglish Intelligenceを定義し、その重要性について英語学習の成長の3要素についての知識を深めることで、そのエッセンスを理解してきました。しかし、これだけではどのようにEnglish Intelligenceを鍛えていけば良いのか、その道筋を紐解くことは難しいでしょう。そこで、次章からはわたしたちの学習の対象である「英語」の本質を見抜くべく、英語の構成要素について深い分析を重ね、English Intelligence形成の糸口を見出していこうと思います。それでは、早速次章に移り、英語の本質に迫っていきましょう。

Chapter 02

English Intelligenceを高める ―英語の本質に迫る

English Intelligence、それは英語学習において直面した問題に対して、自らが現状を分析し、論理的に解を導き、実行することで英語学習を効果的かつ効率的に進めるスキルであると前章で定義しました。しかし、これだけではそのスキルを高めるために何を行うべきか、明確ではありませんよね。どうすればその方法の糸口を見出すことが出来るのでしょうか。これには様々なアプローチが考えられますが、私の考えでは学習対象である英語自体の本質を徹底的に理解することがその開始地点となると思っています。なぜなら、そもそもEnglish Intelligenceを鍛える究極的な目的は英語力を高めることです。その英語に対して浅い理解しか有していない状態で、それを伸ばすための道筋を描くことができるとは到底考えられません。本章では、English Intelligenceを高める方法を見出すことに焦点を当てながら、英語の本質に迫ります。「英語の構成要素」を認識し、それぞれの要素がなぜ英語の構成要素であると言えるのかを分析・理解していきます。英語の本質が理解できれば、おのずと学習戦略を立案する思考力の鍛え方が見えてくるはずです。それでは、早速英語の本質を見抜くべく、英語の構成要素を見ていきましょう。

Fundamentals ｜ 英語基礎

▼ 英語の知識は3つに集約される

文法知識	単語知識	発音知識
Grammar	Vocabulary	Pronunciation
	定型表現、単語、イディオム、ことわざ	国別の発音の特徴 国別のアクセントの特徴 アクセント位置

2.1 英語を構成する3つの知識とは

英語の構成要素とは、いったい何なのでしょうか。英語学習を進める中で、わたしたちはよく「どう勉強すれば効率的・効果的に英語力を上げることができるのか?」といった方法論についてはよく考えることがある一方で、英語の本質的な部分である、英語の構成要素についてはあまり深く考えない傾向にあるようです。さて、英語の構成要素は何かを考えようとすると、特に学習を始めて日が浅い人はさまざまな要素が複雑に絡み合った難解なパズルのように見えてしまうかもしれません。しかし、実はそんなことはなく、英語というのはたった3つの構成要素から成り立っており、大変シンプルです。その構成要素とは、以下の3つです。

単語知識　文法知識　発音知識

この3つの構成要素だけで、英語の全てを説明することができます。そしてこの3つの要素なしには、英語でのコミュニケーションは成立しません。つまり、これら3つの構成要素こそ、英語の本質なのです。特に勉強を開始したばかりの時は、英語がとても複雑で、とらえどころがない存在に思えてしまいます。しかし、実はとてもシンプルな構造から成っているのです。これらの構成要素を一つ一つ、以下の例文を使いながら具体的にみていきましょう。

Fundamentals ｜ 英語基礎

John: He's driving me nuts with his jokes...
意訳： こいつのジョークで頭おかしくなりそうだよ。。。

Tom: Yeah, tell me about it...
意訳： 本当だよなー。。。

―2.1.1 単語知識 ―2.1.1.1 英単語は英語を構成する最小単位

1つ目の構成要素は単語知識です。上の図を見ていただくと分かる通り、英文は英単語が文章の構成要素となり、それが羅列されることで構成されています。今回の例文であれば、he, 's, driving, me, nuts, with ... というように全部で13個の単語が並ぶことで、英文が成立しているわけです。このように、英語というのは英単語が最小単位となり、それが集まることで成立しているということをまず理解してください。宇宙の法則が素粒子レベルまで研究を掘り下げることで徐々に解き明かされているように、英語も最小の構成要素まで思考を馳せることが、その本質を理解することに繋がるはずです。

Fundamentals ｜ Vocabulary (単語知識)

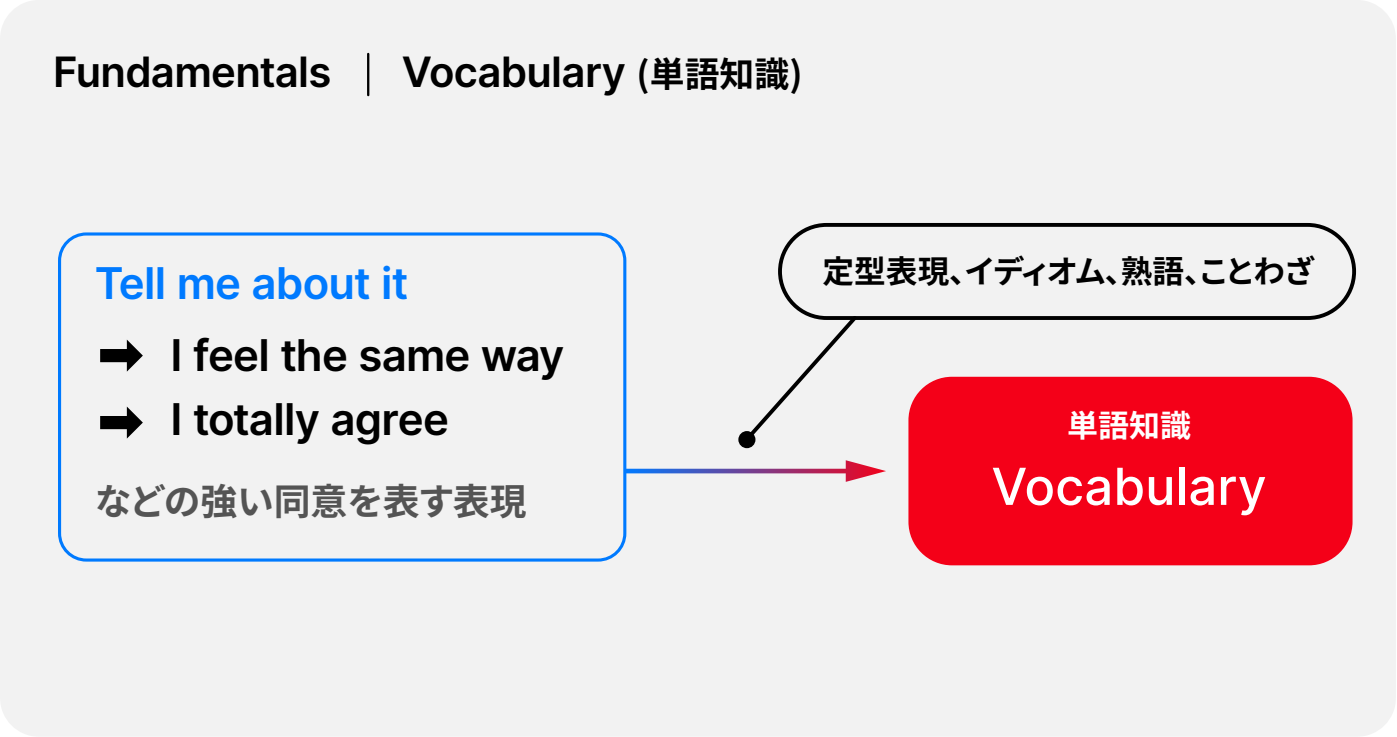
▶ 英語を構成する最小単位で、一つ一つの意味を知っておく必要がある

John: He 's driving me nuts with his jokes

Tom: Yeah, tell me about it ...

―2.1.1.2 英語に意味を与える要素

ここまでで、英語というのは単語を最小構成単位とした集合体であるということが理解できたと思います。そこで次はこの最小構成単位である英単語が英語の中で果たす役割は何かについて考えていきましょう。英単語の役割、それは「英語に意味を与える」ことです。これは、英単語が文の中で果たす大変重要な役割です。このことについてより深く理解するために、上の例文を英単語の観点から分析してみましょう。この例文に含まれる単語には、he（彼）、nuts（頭がおかしくなりそうな）、jokes（冗談）のような、英文の中でダイレクトに意味をもたらす働きをもつ単語と、's（is の短縮形）やwith（～によって）、about（～について）のような、ニュアンスやイメージに影響を与える単語が絶妙に絡み合うことによって成立していますよね。これらの英単語はそれぞれ英文においてもたらす意味の強さに違いはありますが、一つ一つが英語に意味を与える働きをもたらしています。これを考えると、英単語を知らなければ、スピーキングやライティングで発信することも、リーディングやリスニングで情報を受け取ることもできないということが容易に想像できます。私は、英単語はどんな英語学習者にとっても最重要知識であると考えており、それゆえ英単語学習を英語学習の中で最も大切な学習の一つとして位置付けています。単調になりがちな英単語学習ですが、その学習が基礎となって表現できる意味の幅が大きく広がることがイメージできると、日々コツコツと取り組むことが楽しくなるはずです。



―2.1.1.3 単語知識に含まれるもの

さて、ここまで「英単語」や「単語知識」という言葉を何気なく使って説明してきましたが、誤解や混乱を避けるためにも一度これらの言葉が指す範囲をより明確にしておきたいと思います。わたしがいう単語知識というのは、he, driving, me といった一つ一つの英単語だけを指すのではなく、以下のようなものも含んでいます。

定型表現　イディオム　ことわざ　熟語

定型表現、イディオム、熟語という単語はそれぞれ似たような意味で使われることが多く、細かい違いは本書では説明しませんが、簡単に言えば「決まりきった言い回し」を意味します。例えば、今回の例文に登場した “Tell me about it” という表現は直訳すると「そのことについて教えて」という意味になりますが、面白いことにこれを聞いた相手が「教えてあげるね。これはこういうことで…」と説明を始めることはありません。なぜなら、この “Tell me about it” の本当の意味は「君の気持ちわかるよ、本当だよね」という自分の同意を意味する表現だからです。不思議ですよね。これは、教えてくれなくてもよく分かることに対してあえて教えてと尋ねることで「教えてくれなくてもそれがどんなものか分かるよ」という意味を表す皮肉的な同意表現なのです。こうした決まり切った言い回しは、tell, me, about, it という一つ一つの意味を知っていてもその表現の真の意味をとらえることは難しく、ゆえにこれは一つの単語としてとらえる必要があります。

こうした言い回しはネイティブとの会話で頻繁に出現するにも関わらず、日本の英語学習では触れる機会が少ないため、苦労する人の多い分野で

す。Distinction シリーズのようなネイティブの言いまわしに焦点を当てた英単語帳を使って、効率的にカバーしていくことが重要です。

Fundamentals ｜ Grammar (文法知識)

▶ 英語を構成する骨組みで、文章の解釈に影響を与える

Is の短縮

John: He's driving me nuts with his jokes...

躍動を表す進行形

前置詞+名詞の塊

動詞OC ➡ OをCにする感覚

Tom: Yeah, tell me about it...

―2.1.2 文法知識

2つ目の構成要素は文法知識です。先ほど、英語は最小構成単位である英単語が集まることによって成立しており、それぞれの英単語が英文に意味をもたらしていることが分かりました。しかし、ただ自分の言いたいことを表す英単語を並べただけでは、相手が自分の意図したように解釈してくれる保証はありません。ここで大きな役割を果たしてくるのが英文法です。英文法というルールを使って英単語を配置することで、英文は誰が聞いても同じ意味に解釈されるように設計することができるのです。上の例文を見てもう少し具体的に考えてみましょう。 "He's driving me nuts" というのは、「彼は私の頭をおかしくしている」という意味ですが、この英文を聞いてネイティブは

1.) 彼が運転している時に私は頭がおかしくなった

2.) 彼は頭がおかしい私を運転してくれた

3.) 彼はドライブして私にナッツを運んでいる

といった、本来の意図と異なる解釈をすることはありません。どうしてそのような誤解が生まれないのかというと、この英文に含まれる英単語たちはランダムに並んでいるわけではなく、英文法というルールに従って並んでいるからです。今回の場合、drive という単語はSVOC（主語＋動詞＋目的語＋補語）という並び方ができる動詞であり、SVOCの順番で並んでいる語を解釈するときは「OをCにする（今回の場合 me を nuts にする）と解釈する」という英文法（ルール）があります。こうしたルールが存在することにより、誰がこの英文を見ても「彼は私の頭をおかしくしてい

る」という意味であるとわかるわけです。このように、英語は一つ一つ意味を持つ単語が、文法という解釈を定めるルールに従って並ぶことで出来ています。体系的な英文法書を用いて、そのすべてを習得することが不可欠です。

Fundamentals ｜ Pronunciation (発音知識)

▶ 英語の音を構築するための知識で、リスニングとスピーキングでの必要要素

音の繋がり　音の脱落

John: He's driving me nuts with his jokes...

hiːz draɪvɪŋ mi nʌts wɪð(z)ɪ(z)dʒoʊks

Tom: Yeah, tell me about it...

jeə tɛlmiəˈbaʊdi(t)

音の変化

—2.1.3 発音知識

3つ目の構成要素は発音知識です。英語というのは、リーディングやライティングのような、文字が書き起こされた形で存在することもありますが、リスニングやスピーキングのように文字が音に変換された形で存在することもあります。こうなると、英文を目で見ることができないので、英語で相手の言っていることを理解するためには発音の知識が必要になります。まずは一つ一つの単語の音、つまり各単語の発音について知り、覚えなければなりません。例えば上の例であれば he (hiː), is (ɪz), driving (draɪvɪŋ) のように、各単語の音について知る必要があります。もちろん、これらの音は「発音記号」という特別な記号で表されるため、これを読めるようにする必要もあります。次に、音の変化や脱落のルールを知る必要があります。英語を聞いた時に、知っている単語で構成されているはずなのに全然聞き取ることができないという経験はないでしょうか。例えば上の例における "tell me about it" というのは発音記号に沿った音であれば "tel miː əˈbaʊt ɪt" ですが、実際には"ˈtelmi(j)əˌbaʊdɪ(t)"と発音されます。これはなぜかというと、複数の音が組み合わさると、一定の法則に従いその音が変化したり消えたりすることがあるからなのです。こんな風に発音されてしまうと、いくら一つ一つの単語の発音を知っていても、英語を聞き取ることはできませんし、同時に自分を理解してもらうこともできません。それゆえ、音の変化や脱落のルールについての知識も必要となるのです。この「発音知識」は、発音マスタークラスや発音学習本のような網羅的な発音教材を使って短期間で習得可能なエリアです。

Fundamentals | 知識量

文法&発音＝短期間で網羅可能
単語＝半永久的に学習が続く

Grammar (文法知識)

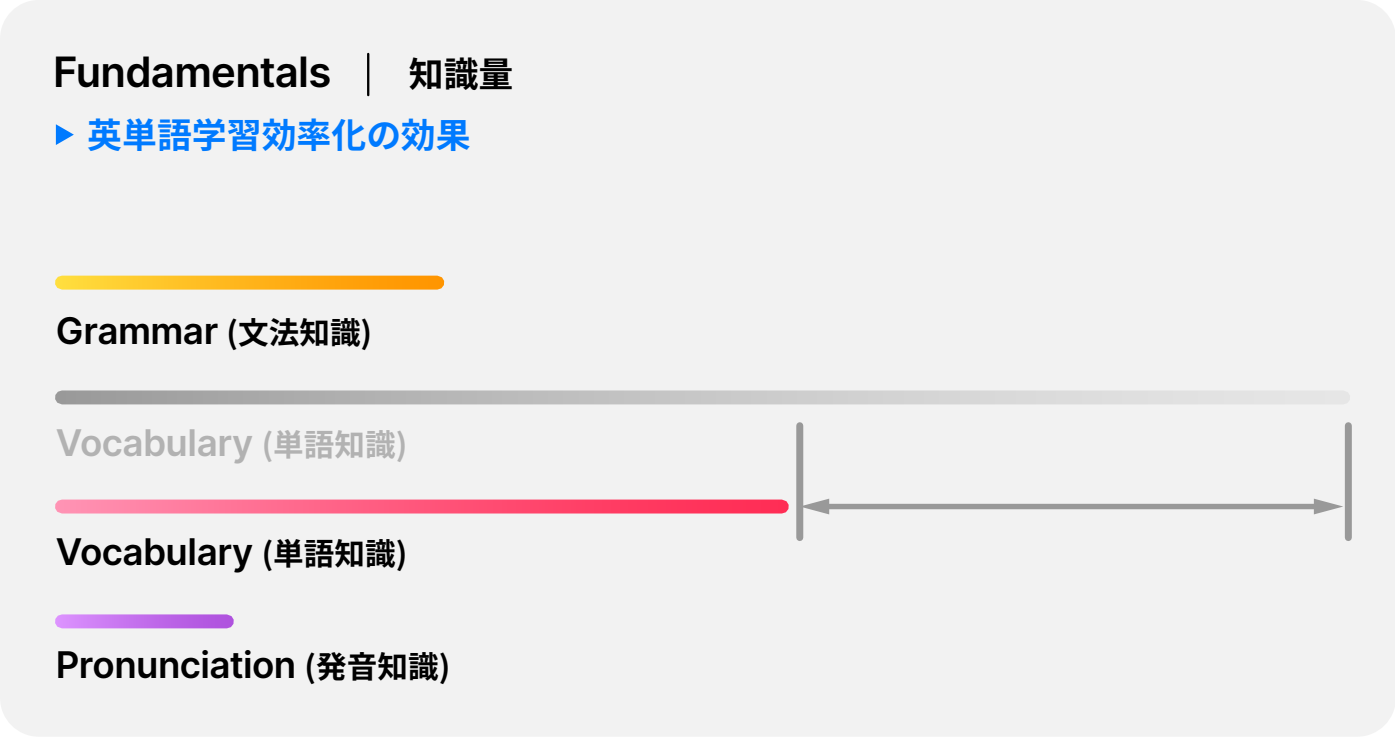
Vocabulary (単語知識)

Pronunciation (発音知識)

2.2 3つの知識習得に必要な学習量

ここまで、英語という言語は単語知識、文法知識、発音知識の3つの集合体であると理解しました。英語は一つ一つ意味を持つ単語が、文法という解釈を定めるルールに従って並ぶことで出来ており、リスニングやスピーキングでは、それが発音に変換されるという、英語の本質をよく理解できたのではないでしょうか。さて、ここからはこれらの知識を習得するのにどれほど時間がかかるのか、そしてそこから見出すことのできる英語学習最適化の鍵について考察していきたいと思います。まずは学習にかかる時間について考えていきましょう。私の考えでは、文法知識は最低1日最低3時間（理想は5時間）を2か月間（＝3時間×60日=180時間）、発音知識は1日1時間を約1ヶ月（＝1時間×30日＝30時間）という短期間で習得が可能（実際に発声できるようになる練習を除く）なのに対し、イディオム、定型表現、熟語など様々な形を含む単語知識は学習すべき量が膨大であり、その学習は半永久的に続きます。英文法や発音というのは基本的にはルールの集合体であるため知識がより体系化され、ゆえに量が比較的限定されているのに対し、英単語というのは一つ一つ異なる意味を有し、その組み合わせによっても意味が変わることが多々あるため、それだけ情報量が膨大になるのです。さて、これを「英語学習をより効率的かつ効果的に進める」という観点から考察すると、以下のことが見えてきます。それぞれについて、より詳しく見ていきましょう。

1.) 英単語学習の効率化が英語学習全体の効率化に繋がる
2.) 英文法、発音の学習を短期集中で完成させることが英語学習の整理に繋がる



―2.2.1 英単語学習の効率化が英語学習全体の効率化に繋がる

英単語学習が英語学習全体を見た時に多くの時間を占めるのであれば、その学習を効率化することで英語学習全体が大きく効率化されることは明らかです。上の図を見てください。英文法や発音の学習というのは最大学習量が限定的であるため、それをいくら効率化しても節約できる労力・時間も限定的です。例えば、先ほど英文法の習得に必要な学習時間は約2か月間（＝3時間×60日=180時間）であると申し上げましたが、これをどれだけ効率化しても、そこで節約できる学習時間は180時間です。仮にこれが一日5時間という理想の学習を想定したとしても、最大300時間なわけです。発音も同様です。発音学習に必要な時間量が約1ヶ月（＝1時間×30日＝30時間）なのであれば、その効率化によって得られる時間的便益も最大で30時間なわけです（もちろん学習の効率化によって学習時間がゼロになることはあり得ないため実際にセーブできる学習時間はこれよりも少なくなります）。しかし、英単語知識の学習は半永久的に続きます。英単語学習はこれら2つの知識と比較すると習得にかかる時間がとても大きく、その分だけその学習の効率化によって得られる時間的メリットは大きいと言うことになります。つまり、英単語学習をいかに効果的・効率的に行うかが、英語学習全体を改革する上での大きな鍵となるということです。Atsueigoではこれでもかと言うほど英単語の重要性や学習方法について話していますが、その背景にはこの理念があります。

―2.2.2 英文法・発音を完成させ、英語学習の整理に繋げる

英文法と発音の知識を短期間で習得してしまえば、自分の習得すべき知識は単語知識のみであると断言できる状況をつくることができ、それゆえ英語学習が整理され、効率的になります。しかし、中途半端に複数の知識の学習を進めていると、自分の英語知識において一体何が欠けているのか、そして何の学習に自分の時間を割り当てるべきなのかが分からなくなり、結果として学習が非効率になることがあります。例えば、英文法の問題集を解き進めながら、発音記号も少しずつ英単語帳を進めながら覚えていくという学習スタイルをとったとしましょう。確かにこの学習スタイルは3つの英語の構成要素の知識すべてを同時並行的に向上することになります。しかし、こうした学習をしていると、英単語、英文法、発音のどの知識に関してもなかなか自信を持って完璧といえるレベルには到達せず、結果として英語学習を進める中でこれら複数のことを同時に考えなければならない状況が生まれます。このように、あちこちにやるべきことが発散していると、それだけ学習をスムーズに進める上での弊害になるのです。しかし一方で、短期集中型で英文法と発音の知識を一気に身に着ければ、自分の中で知識として欠けている領域は英単語のみであり、それゆえ自分の知識習得に費やす時間はすべて単語学習に割り当てれば良いと分かります。このように、短期集中的に英文法と発音については習得し、あとは英単語にフォーカスした学習を進める状況をつくることが最も効率的であると考えています。

本章では英語の本質に迫るべく、英語という言語を単語知識、文法知識、発音知識の3つに分解し、それぞれの役割について分析と考察を重ねることで、学習対象である英語の本質を理解してきました。その結果、英語学習全体において英単語が大きな割合を占め、ゆえに学習効率化の鍵となることも良く理解できたと思います。今回実行した英語の構成要素の識別と分析は、今後English Intelligenceを鍛えるために何をすべきか理解する上で重要な基礎となってきますので、確実に理解を深めてから次章に移りましょう！

Chapter 03

English Intelligenceを高める ―英語の運用プロセスを徹底分析

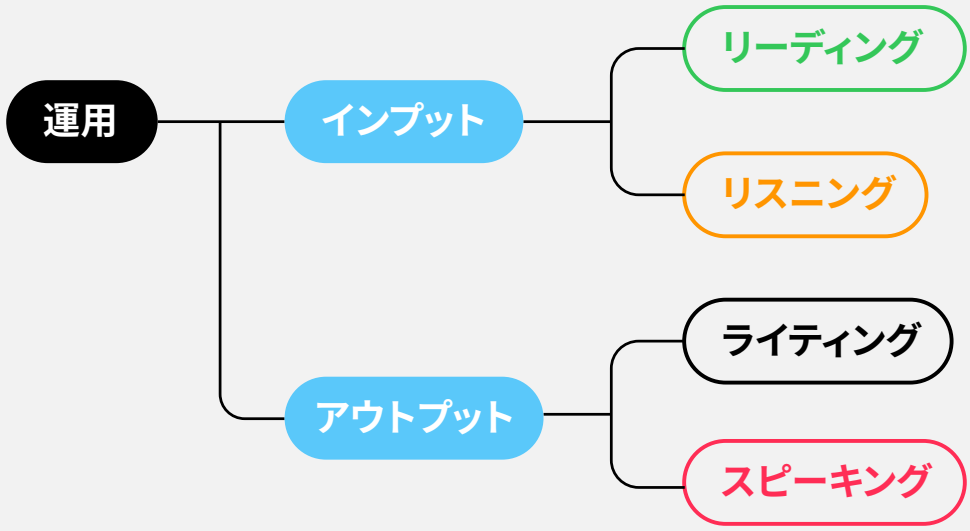
English Intelligenceを高める方法を見出す準備段階として、前章では英語の本質に迫ることをテーマに、英語を構成する各要素についての理解を深めていきました。その結果、英語は意味を与える単語知識、解釈を統一化する文法知識、そして音の法則である発音知識の3つから成立していることが明らかとなりました。しかし、これだけでは「英語学習において直面した問題に対して、自らが現状を分析し、論理的に解を導き、実行することで英語学習を効果的かつ効率的に進めるスキル」を高めることはできません。なぜなら、これらは知識レベルの話で、実際に英語でコミュニケーションを行うというのはこれらの知識を運用することだからです。この「知識を運用する」とは一体どういうことなのかについて明確に理解しないと、English Intelligenceを向上させることは不可能です。

そこで本章では

1.) 実際に英語を運用する上で3つの知識がどう絡み合っているかを理解する
2.) 英語を使う上で必要な能力を識別し、その必要能力を高める方法を立案する

という2つのステップを経ることで、English Intelligenceを習得していきます。英語学習の中で問題に直面した時に、自らの頭で考えて論理的に解を導くために確固たる基礎を一緒に構築していきましょう。

Operation ｜ 知識の運用



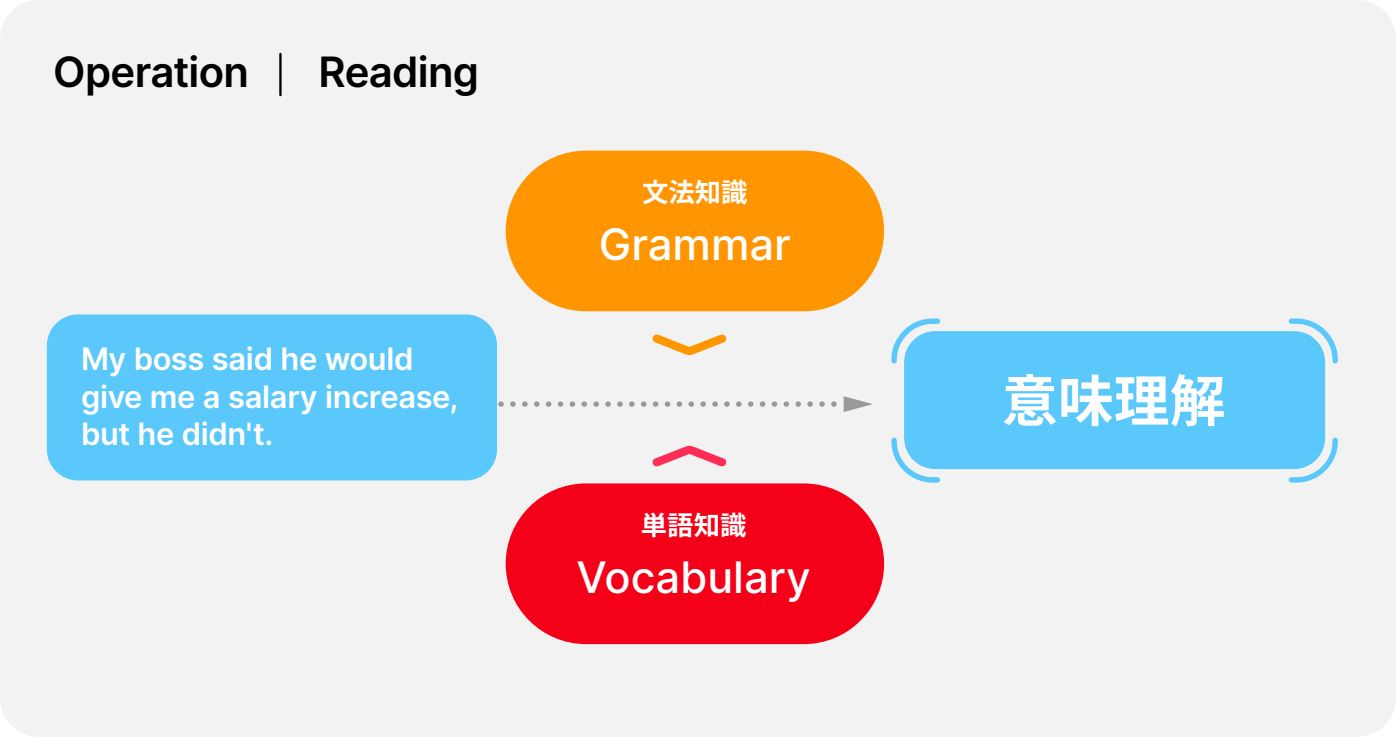
3.1 英語を運用するとは?

わたしたちが英語を学習している目的は、実際に英語を運用する能力を高めることです。英語の構成要素である3つの知識は、その運用に必要となる知識たちです。たとえると、構成要素は料理に必要な材料で、それを運用するというのは、材料を使って料理を作ることです。材料だけ揃えても、それを料理に仕上げられなければ、その材料の最大の価値は発揮されません。英語も同じです。英単語や英文法、そして発音記号といった知識が頭の中に豊富にあったとしても、実際に英語を聞いたり話したりできなければ、それらの知識は単なる知識でしかありません。実際にコミュニケーションツールとして英語を使えて初めて、その知識に価値が生まれるはずです。

さて、この「英語を運用する」という行為ですが、それが一体何なのか、そしてどのようにして成立しているのか、考えたことはあるでしょうか。私はよく「英語を運用する」という行為を以下のように定義しています。

> 英語を運用するとは、英語の3つの構成要素である単語知識、文法知識、発音知識を適切に使用することで英語を理解（インプット）、そして発信（アウトプット）できるようになること

この定義でいう英語のインプットというのはリーディングとリスニングを、そして英語のアウトプットはライティングとスピーキングを意味しています。つまり、英語を運用するというのは、英語の3つの構成要素に対する知識を使い4技能を達成することです。この定義をより明瞭に理解するために、実際に各技能を発揮する上でこれら3つの知識がどう絡み合っているか、細かく見ていこうと思います。



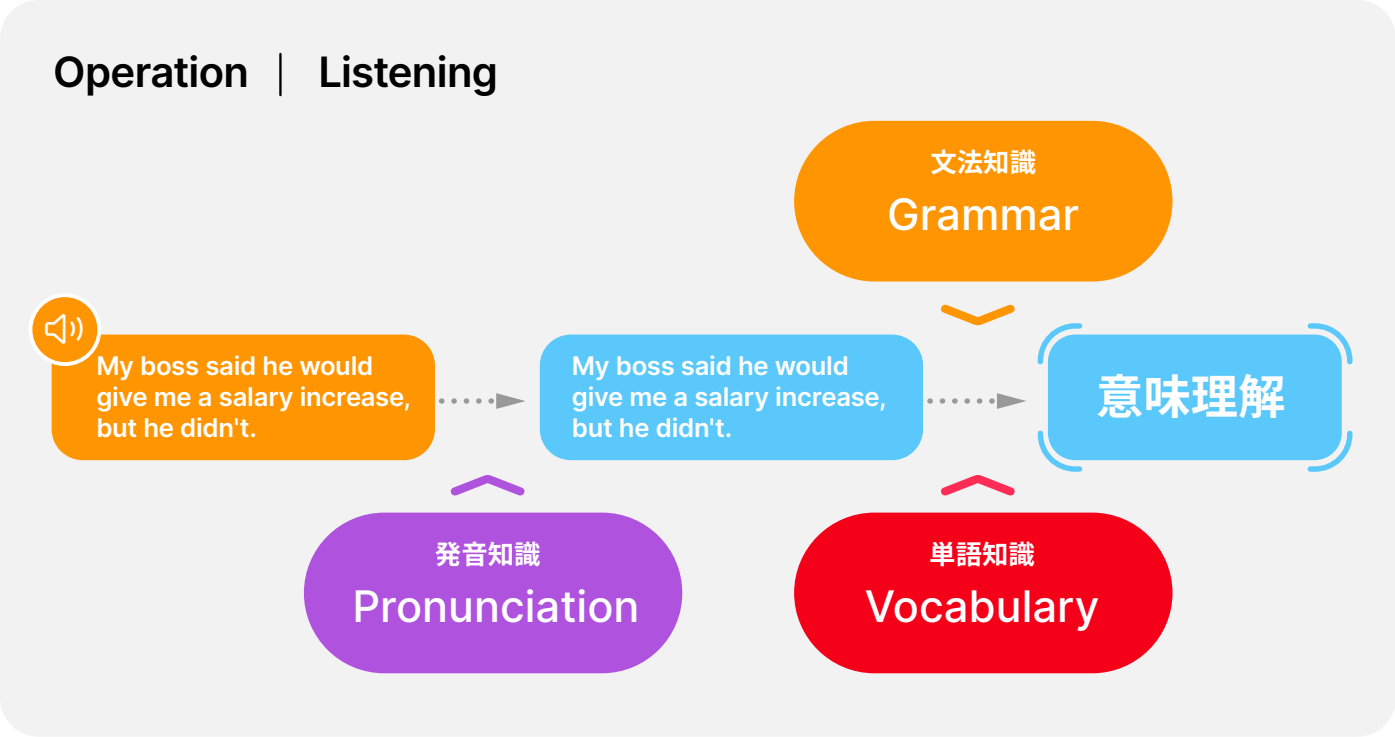
3.2 英語の運用プロセスを分析する ―3.2.1 リーディング分析

まずはリーディングから見ていきましょう。リーディングは、書かれた英文を見て、読み、意味を理解するという、インプット作業です。この時に使用するのは、英単語と英文法の2つの知識です。読む作業に音は関係しませんので、発音知識は基本的に不要です。それでは、これを以下の例文を使用してみていきましょう。

> My boss said he would give me a salary increase, but he didn't.
>
> 私の上司は私の給与を上げてくれるといっていたが、上げてくれなかった。

この英文を読むプロセスをものすごいスローモーションで行うと、どのように英単語と英文法の知識が使われているかをよく理解することができます。自分の目線は、英文の左から右に進んでいきます。そしてその中で、自分の単語知識を使って一つ一つの単語の意味を理解していきます。My（わたしの）、boss（上司）、said（言った）、he（彼は）… のように、一つ一つの単語の意味をとらえていきます。それと同時に、どうしてこの順番で単語が並んでいるのかも、文法知識を活用し、同時に理解していきます。“My boss said …” というところではSVO（主語＋動詞＋目的語）のイメージが出てきて、次に目的語が登場することを予想しています。そして “he would” というところで that が省略されており、かつここから文章が続くはずだとわかります。また「時制の一致」で will が過去形の would に変わっているのだと、納得します。このように一つ一つの単語の意味を理解しながら、その裏に存在する文法をとらえることで、正しい意味の解釈をしながら左

から右に進む、これがリーディングです。また、これはすべての技能に共通して言えることですが、こうしたステップは、最初は意識的に行いますが、その意識的な作業を積み重ねることで徐々に無意識化していきます。つまり、最終的にはいちいち文型を考えたり、何が省略されているか考えたりせず、英語をそのままダイレクトに理解・発信できる状態につくり上げていきます。

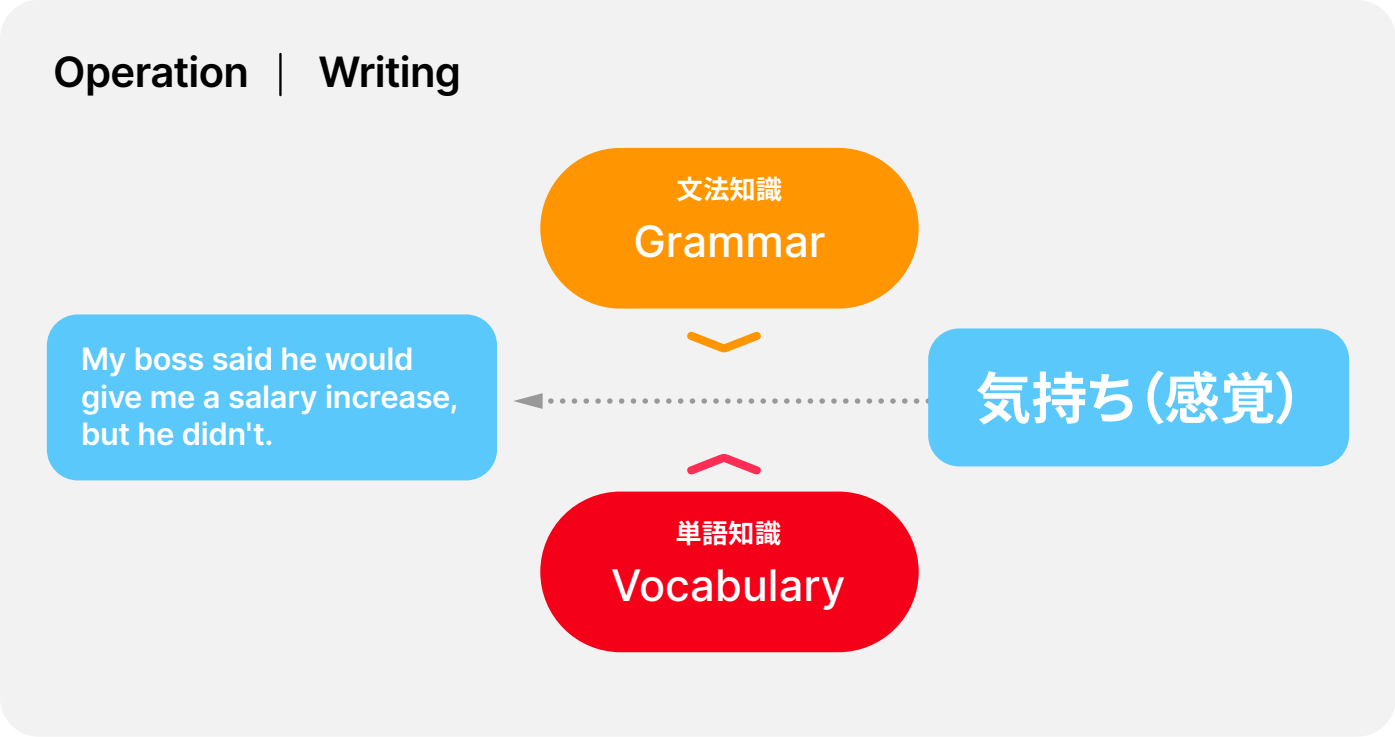


―3.2.2 リスニング分析

リスニングは、リーディングと同じく意味を理解するというインプット作業です。唯一リーディングと違う点は、理解するプロセスの開始地点にあります。リスニングでは英文を文字の形で見ることができないため、代わりにまずは音で表された英語を耳で「聞き取る」という作業が必要になってきます。そしてその耳に入ってきた英語が、どんな単語の羅列であるのかを瞬時に認識し理解する必要があるため、リスニングにはリーディングにはない非常に難しいステップが存在していると言うことができます。もう少し詳しくこの聞き取りのプロセスを理解するために、先ほどの例文を使用して解説していきます。例文冒頭の “My boss said” という部分は、文構造が難しいわけでも、英単語が難しいわけでもありません。それゆえ、この文字だけを見れば「私の上司は言った」という意味が、少し英語を勉強した方であれば難なく理解できると思います。しかし、これがリスニングの場合どうでしょうか。実際、多くの場合ネイティブはこれを “maɪ ˈbɑːs(s)ed” とひとまとまりにしてさらっと言ってしまいます。こうした状況では、これが “my boss said” であると認識できないと、意味が分からなくなってしまいますよね。相手がどんなに簡単な英語を話していても、音の形になっているせいでとてつもなく難しく感じるという経験をみなさん一度はしたことがあるのではないでしょうか。それは、この聞き取りの能力に関係しています。

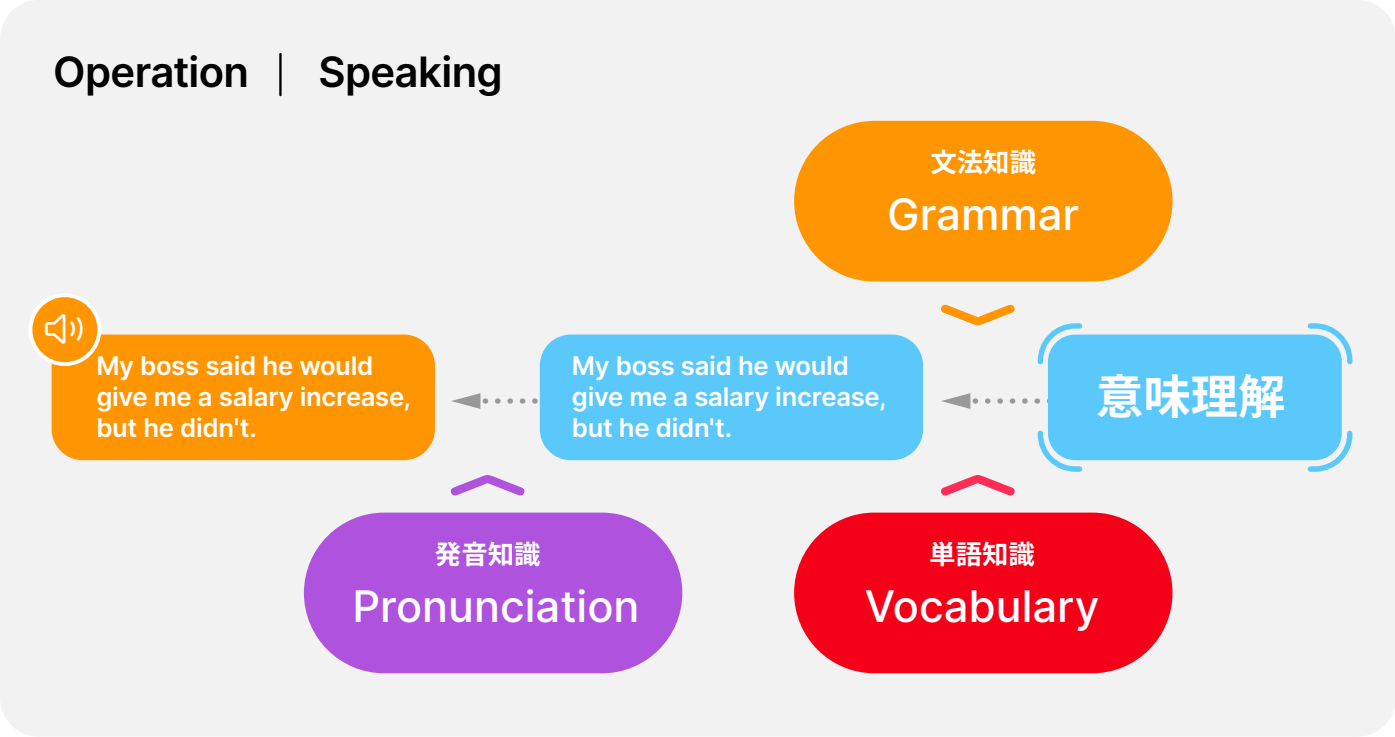
聞き取り能力さえ伸ばせば、リスニングはずっと簡単になります。先ほども申し上げたように性質的にはリーディングもリスニングも同じインプット作業です。聞き取り以外のプロセスはリーディ

ングと全く同じで、単語と文法の知識を適用して、意味を理解するということです。その作業を目で追いながら行うか、聞きながら行うかの違いです。聞き取り部分さえマスターすれば、意味取り作業の部分はリーディングもリスニングも同じプロセスを経ることになります。



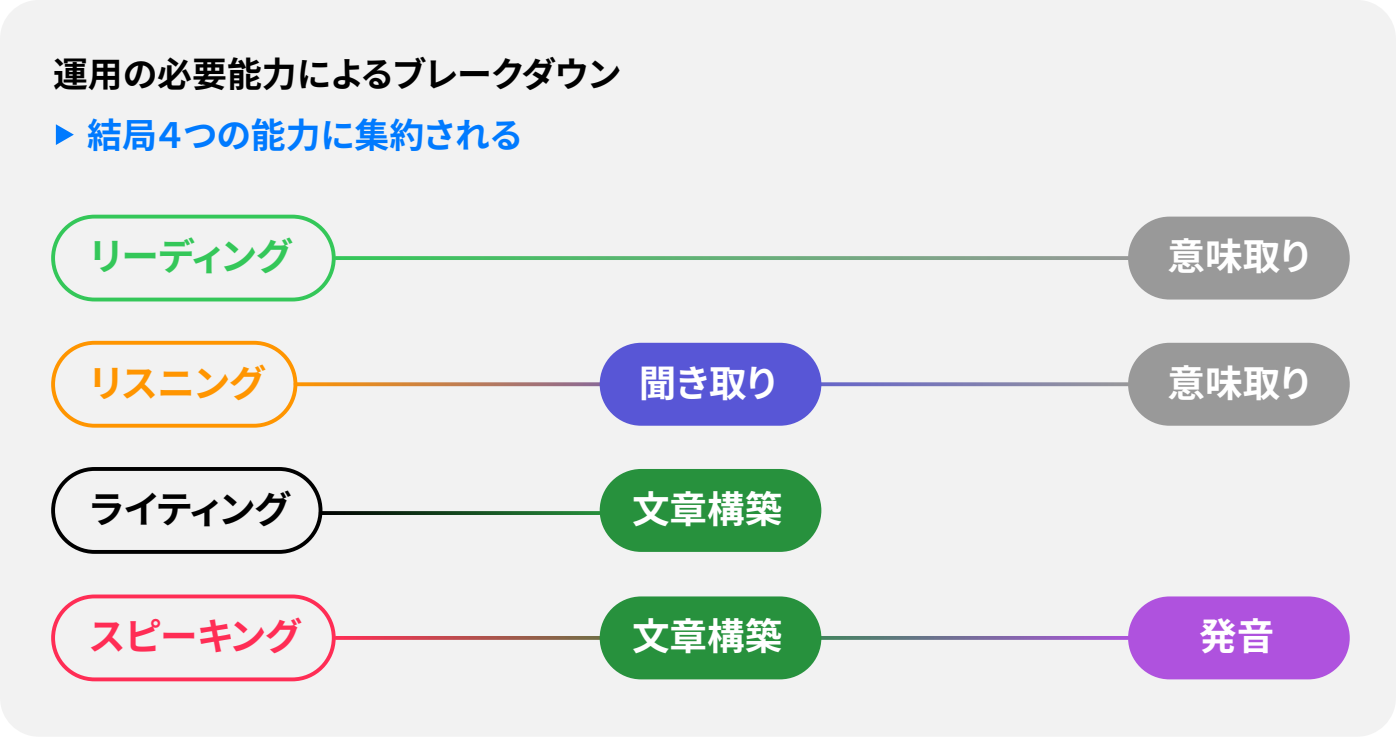
―3.2.3　ライティング分析

ライティングは、自分の頭の中にある言いたい気持ちや意味の感覚を、適切な単語知識と文法知識を取り出し、組み合わせることで英文を作成するアウトプット作業です。ライティングはその名の通り文字を書く作業なので、音に関連する発音知識は基本的には必要ありません。つまり、一切発音についての知識はなくとも、ライティングで素晴らしい文章を書くことは可能です。さて、ライティングのプロセスをより深く考察するために、また同様の例文を見ながら考えていきましょう。アウトプット作業の始点はスピーキング・ライティング問わず、必ず「言いたい気持ちやその意味の感覚」です。今回の例文を英作文する側の立場でゆっくり考えてみると、まず頭の中には、自分の上司が過去に給与をくれると言った場面や、それが結局実現しなかったことによる残念な感情があります。そして、その気持ちを表現するために英語の構成要素である単語知識と文法知識を適切に取り出し、英文を作成していきます。これがライティングの作業となります。とてもシンプルですが、インプットと違いこの適切な単語知識と文法知識を自ら選択し組み合わせるというとてもアクティブな行為が必要となるため、なかなか難易度の高い作業となります。しかし、ライティングはスピーキングと比較すると時間的な余裕があるため、ゆっくりと時間をかけ、じっくりと知識の選定作業を行った上でのアウトプットが可能という意味で、アウトプット学習において始めやすい領域であることは間違いありません。また、ライティングの文章というのは時間をかけてじっくりと文章を構築していくという性質上、スピーキングと比較してより無駄が少ない英文になる傾向にあります。



―3.2.4 スピーキング分析

スピーキングは、ライティングと同じで自分の気持ちや感覚を英文の形にアウトプットする作業です。ライティングとの唯一の違いは、文字に書きおこすのではなく、自分の喉を震わせて、音に変換していくということです。プロセスにおける違いはこれだけです。しかし、だからといってライティングが出来る人が発音の練習をすればスピーキングをサクサク出来るかと言えば、必ずしもそうではありません。なぜなら、スピーキングというのは相手とのキャッチボールであり、テンポよく気持ちを英文に変換する作業が必要となるからです。例えば、今回使用している My boss said he would give me a salary increase, but he didn't. という例文はライティングであれば問題なく書ける方が多いと思います。それは、「動詞の “said” が過去形のため、時制の一致のために “will” を “would” にする」といった細かい部分もしっかりと考える時間的余裕があるからです。このように、ライティングの時はじっくりと頭で構成を練り、適切な知識を選定した後に英文作成作業を行うことができます。しかし、実際に会話するとなるとどうでしょうか。時制の一致、正しい単語の選択など、多くのことを一瞬で行わなければならず、これによりスピーキングの難易度はグッと高まります。ライティングとスピーキングはプロセスとしてはほぼ同じですが、そのスピード感から難易度に違いが出ます。また、アウトプットのスタイルにも違いがあります。ライティングはじっくり練った少ない数の英文をアウトプットするというスタイルを取るのに対し、スピーキングではドンドン思いついた情報を出来る範囲で論理的に並べ、その後は言い直したり、情報を追加したりすることで内容を膨らませていくというスタイルを取ります。



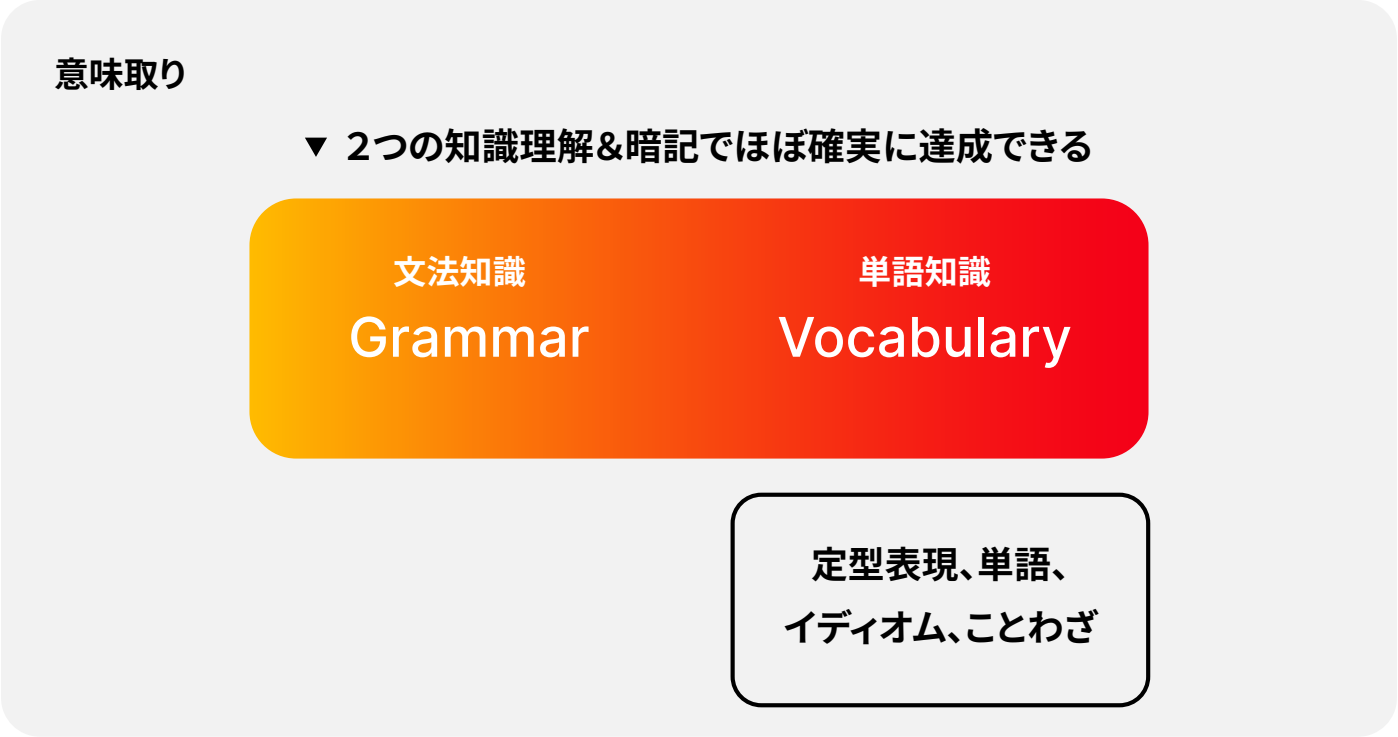
3.3　分析から導かれた運用能力向上に必要な4つの能力

さて、ここまで英語の4技能の運用プロセスを分析することにより、各技能において必要となる知識が必ず単語、文法、発音の3つに集約されることがはっきりとしました。実は、この運用プロセスの分析は必要知識が何かを明確化しただけではなく、英語を運用する上で必要な「能力」が何かについてもはっきりと示しています。上の図を見てください。リーディングは書かれた英文を単語知識と文法知識を組み合わせることにより意味を解釈する作業であり、「意味取り」の能力が必要となる技能です。リスニングは、インプットという意味ではリーディングと一緒ですが、英文が音で入ってくるため、まずは「聞き取り」を行うことでその英文が何か（つまりどのような英単語がどのような順番で並んでいるのか）　を理解し、そこで初めて意味取りの作業を開始できるようになります。つまり意味取りだけでなく「聞き取り」の能力も必要です。次にライティングを見ると、ライティングは頭の中にある単語知識と文法知識を組み合わせて文章を構築して、自分の中にある言いたいことを表現する作業です。つまり、「文章構築」の能力が必須となります。そして最後のスピーキングは、アウトプットという点ではライティングと同じですが、それを発音知識を駆使して自分の口で音に変換しないといけないという点で、「発音」する能力が必要となるのです。

ここから分かること、それは英語を運用する上で必要な能力は以下の4つに集約されるということです。

1. 意味取り能力
2. 文章構築能力
3. 聞き取り能力
4. 発音能力

とてもシンプルですよね。英語を操る上で必要な能力にはとても多くのものが複雑な形で存在しているように見えますが、結局はこの4つに集約することが可能なのです。さて、気になるのはこの4つの能力をどうすれば向上できるか、という部分ですよね。そこで次項からは、各能力の伸ばし方について考えていこうと思います。



3.4 意味取り能力 ―3.4.1 意味取りに必要な知識

まずは意味取り能力を高める上で必要となる知識が何かについて考えていきましょう。意味取り能力に必要な知識、それは

単語知識　文法知識

の2つです。この2つの知識に関して深い理解を持ち、覚えていれば、知識レベルで言えばもうほぼ確実に意味取りができる状態にあるはずです。前にも申し上げたように、英語は一つ一つ意味を持つ単語が、文法という解釈を定めるルールに従って並ぶことで出来ており、そのおかげでその英文の意味が1つに定まるように出来ています。また発音知識は聞き取りや発音する際には必要ですが、意味取りの段階では不要です。単語知識と文法知識があれば十分です。ちなみに、私がここで「ほぼ確実に」意味取りが達成できると言っている理由は、これら2つの知識があっても意味取りが出来ないケースがあるからです。それは、単純に文章自体が難解すぎるようなケース、日本語で書かれていても理解できないケースです。そうした英文は、いくらその英文で使われている英単語と英文法が理解できていても、意味を取ることはできません。

The sameness of a meaning occurs with the varying interpretations people might give the meaning, and with the differences in vagueness and distinctness the proposition might enjoy in various minds.

意味の同一性は人々が意味に対して与える様々な解釈と同時に、そしてその命題が様々な人々の頭の中で持ち得る曖昧さや明確さにおける違いと共に発生するものである。

（2002 年京都大学入試問題から抜粋）

例えば上の例文を読んでみましょう。

意味取りできましたか？私は、この英文に登場した英単語の意味は全て知っていますし、使用されている文法知識も全て理解しています。しかし、瞬時に意味は取れませんでした。これは、英語力に起因していることではなく、内容自体に起因する部分が大きいからです。つまり、英語力以外の能力が必要とされているわけです。英文を理解しようとしたときに英語の構成要素を考え、どこにも理由を見つけられない時はこれが読めないことの原因になっているケースが多いです。一つの可能性として覚えておくとよいでしょう。

意味取り

Grammar Vocabulary

Is の短縮

John: He 's driving me nuts with his jokes

躍動を表す進行形

動詞OC ➡ OをCにする感覚

前置詞+名詞の塊

Tom: Yeah, tell me about it ...

「ほぼ」確実に達成できる ➡ 単純に文章自体が難解すぎる場合は英語力の問題ではなくなる

―3.4.2 意味取り能力を高める方法

意味取りに必要な知識が分かったところで、次は意味取り能力を高める方法について考えていきましょう。ステップとしては主に2つあります。

1.) 単語と文法知識の向上
2.) 精読と精聴、そして多読と多聴へ

一つ一つ見ていきましょう。単語と文法知識が「意味取り」を行う上での必要知識ですので、まずはこれらの知識を固める必要があります。英単語に関しては半永久的に続く学習ですが、最低でも大学受験レベルの英単語については理解・暗記した状態を築き上げておきましょう。英文法に関しては知識量が少ないため、文法知識は1日3–5時間を2か月間（＝3-5時間×60日=180-300時間）で学習が可能です。すぐに実践的な練習をしたくなる気持ちになると思いますが、長期的に見るとしっかりと基礎学習を最初に行った方が、明らかに効率が良くなります。詳しい英単語と英文法学習方法はYouTubeの動画や公式サイトの記事でも公開していますので、そちらもあわせてご覧ください。

英単語と英文法の知識が固まったら、あとはそれを使用して、リーディングとリスニングの練習をするだけです。なぜ練習をする必要があるかと言うと、いくら必要十分な知識があったとしても、場面に応じて適切な英単語と英文法の知識を取り出して、適切に解釈できるわけではないからです。そこで、まずはリーディングでは精読、リスニングでは精聴という方法を使って英語学習を進めます。これは「精」というところから分かるように、読んだ、聞いた英文を細かく詳しく分析する作業です。具体的なステップは精読も精聴も基

本的には同じで

1.) 英文の中で意味の分からない部分を識別する
2.) 意味の分からない原因を追究する（単語、文法、またはその両方）
3.) 単語であれば単語の意味を、文法であれば文法の仕組みを理解し、暗記する
4.) 再度新たに得た知識をもとに文章を理解する

というステップで行われます。

このように、自分が読めない、聞けないという問題を細かく分析し、その原因を追究し、適切な解を見つけることで本質的に能力を高めていきます。この作業を行わずして、ただがむしゃらに読んだり聞いたりし続けてもその効果は限定的で、本質的に読む、聞く力はなかなか伸びていきません。自分が意味を取れない原因が分からない状態で同じ文章を読み続けたり、聞き続けたりしたからといって、その意味が取れるようにはなりませんよね。それは、大量にただただ読む、聞くという行為の中には、読めるようになる、聞けるようになるためのロジックが存在していないからです。もちろん、幼児期のようにまだ頭がスポンジのように柔らかく、何でも吸収できるような状況であれば話は別かもしれませんが、ほとんどの方がそうした時期を過ぎてから英語学習をしているかと思います。

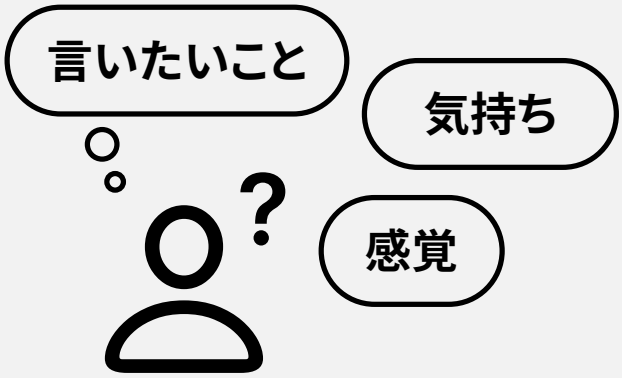
とは言ったものの、大量に読んだり聞いたりする作業が重要でないと言っているわけではありません。当然多読、多聴を行うことも、私は英語の意味取り能力を高める上で必要だと考えています。

しかし、ここで私の言う多読、多聴というのは一般によく言われるただ大量に読んだり聞いたりするということとは違います。私の多読、多聴の定義は「精読、精聴の絶対量を増やすこと」です。つまり、精読と多読、精聴と多聴というのは性質としては全く同じであり、単にその行う量が増えていくだけという考え方です。時間がかかる精読、精聴を大量に行うなんて現実的に可能なのか、と思うかもしれないですが、可能です。なぜなら、みなさんのリーディング、リスニングの力は、精読、精聴の積み重ねにより向上し、結果として前述の4ステップを行う回数は減ってきます。すると、一回当たりの精読、精聴にかかる時間は減少し、その分追加的に精読、精聴作業を行うことが出来るようになるのです。ここから分かる通り、普段は精読と多読、精聴と多聴というのは別物のように扱われることが多いですが、実際には（少なくとも私の考えでは）精読、精聴を行う量が、段階的に増えてくることが多読、多聴であり、かつそれは英語力が向上することにより自然に起きる現象なのです。「精読も結構やったし、そろそろとにかく大量に英文を読んでいこう！」と意気込んでいる方をよく見ますが、何度も言うように、ただ大量に読む、聞く作業の効果は限定的なのです。

ちなみに、先ほど精読と精聴は同じ4ステップを取るという話をしましたが、精聴には本当はもう一つ、「聞き取り」を伸ばすための作業が必要となります。しかし、今回は「意味取り」の能力を伸ばすために何をすべきか、という観点で話を進めていますので、省略しています。これについては後ほどお話します。

文章構築

▶ **2つの理解&暗記 x 様々な場面での構築機会**



選択肢が沢山ある中どれが最適か判断するのが難しい

文法知識
Grammar

単語知識
Vocabulary

3.5 文章構築能力 ―3.5.1 文章構築に必要な知識

次に文章構築の能力について考えていきましょう。この能力はライティングとスピーキングで主に必要とされる能力です。意味取りがインプットに関する能力であったのに対し、この能力はアウトプットに関する能力です。そして、この能力を高める上で必要となる知識は、先ほどと同様に単語知識と文法知識の2つです。当然スピーキングでは発音する際に発音知識が必要ですが、発音する前段階である文章構築の時点では、必要となる知識は英単語と英文法の2つのみです。インプットにおいても、アウトプットにおいても、いかにこの2つの知識が重要か、よく分かると思います。

―3.5.2 文章構築能力を高める方法

文章構築能力は、以下の二つのステップを繰り返し行うことで向上させることができます。

1.) 「自分の言いたいことや感覚」を、時間をかけても良いので、知っている単語知識と文法知識を組み合わせて英文で表現する

2.) 「自分の言いたいことや感覚」を強く心の中にイメージし、作成した文章を実際に使っている情景もイメージしながら、気持ちを込めて何度も口に出して言う

これがアウトプット学習の基礎の基礎になります。それぞれ見ていきましょう。

―3.5.3 言いたいことを時間をかけてでも文章化してみる

最初に行う作業は、自分の言いたいことを知っている知識を使って文章の形で表現するという作業です。この段階ではゆっくり時間をかけても良いですし、不安であれば紙に書き出してもOKです。とにかくどうやって自分の気持ちを英文で表せるかを、単語と文法知識を駆使して作っていきましょう。自分の知識で対応できなければ、ネットやSNSなどで不足している知識を補充し、その文章を完成させていきます。例えば、「今日はすごく疲れているから今夜は早めに寝なきゃ」という気持ちを表現したい時に

> I'm so tired today. I need to go to bed early tonight.

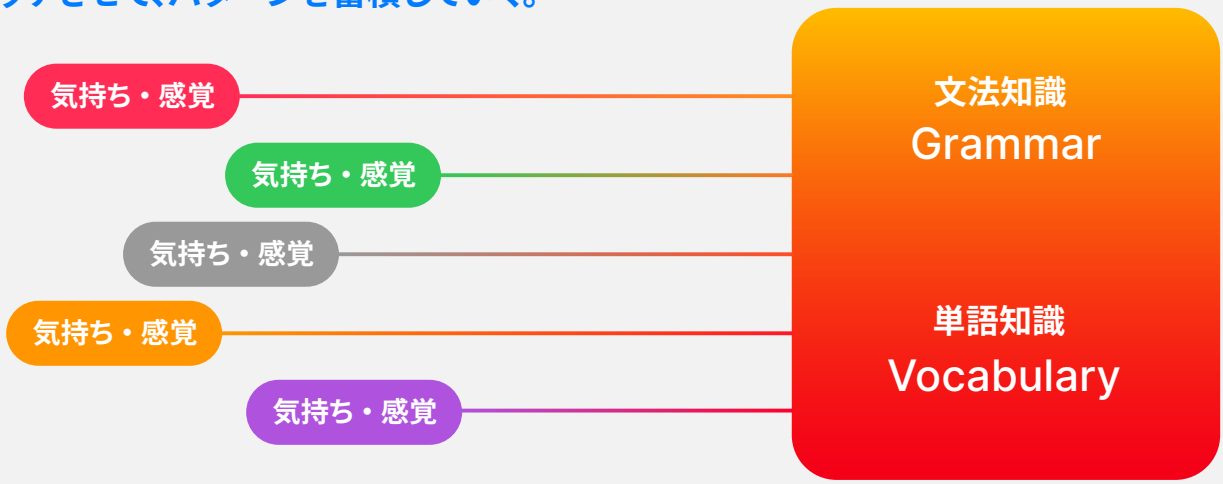
という文章を作成したとしましょう。

疲れている（＝tired）、寝る（＝go to bed）といった必要な単語・表現を思い浮かべ、それを「I'm ＋ 形容詞」、「I need to ＋ 動詞の原形」といった文法知識と組み合わせて、文章をつくっていきます。最初は細かいニュアンスなどを気にして完璧な英語をアウトプットするよりも、粗削りでも幅広く自分の感覚を表現できることの方がコミュニケーションという観点から優先順位が高いと思っています。ゆえに、個人的には細かいリサーチなどをし過ぎるのはおすすめしません。しかし、簡単なことであればネットやTwitterなどで調べることができるので、不安な人はサクッとチェックすると良いと思います。例えば、上記のI'm so tired today. I need to go to bed early tonight. をツイッターの検索欄に入れると、同じ文章が何個も検索結果に表れるので、ここからこの言い回しが自然である確率が高いと判断できます。このように、あまり時間のかからないチェックであれば、行っても良いでしょう。

ただし、繰り返しになりますが、粗削りでも幅広く自分の感覚を表現できることの方が、完璧な英語を最初から目指すよりも重要です。完璧を気にしていると、いつまでたっても前に進みません。多少完璧な状態からずれている状態でも、アウトプット機会を増やす中で「自分はずっとこういう意味でこの表現を使っていたけど、実際のニュアンスは少し違うみたい」「ネイティブはこうやって表現するんだな。自分も次からはこの表現を使おう」といった「気づき」を通して、粗削りだった英語の角は取れていきます。こうした気づきは、自分の粗削りの英語が存在して初めて生まれるものです。まずは自分の知識ベースで文章をつくり、自分が話せる英語を増やしつつ、気づきの蓄積によってその英語を修正することこそが、アウトプット能力を向上する上で最も効率的な道筋であると考えています。

文章構築

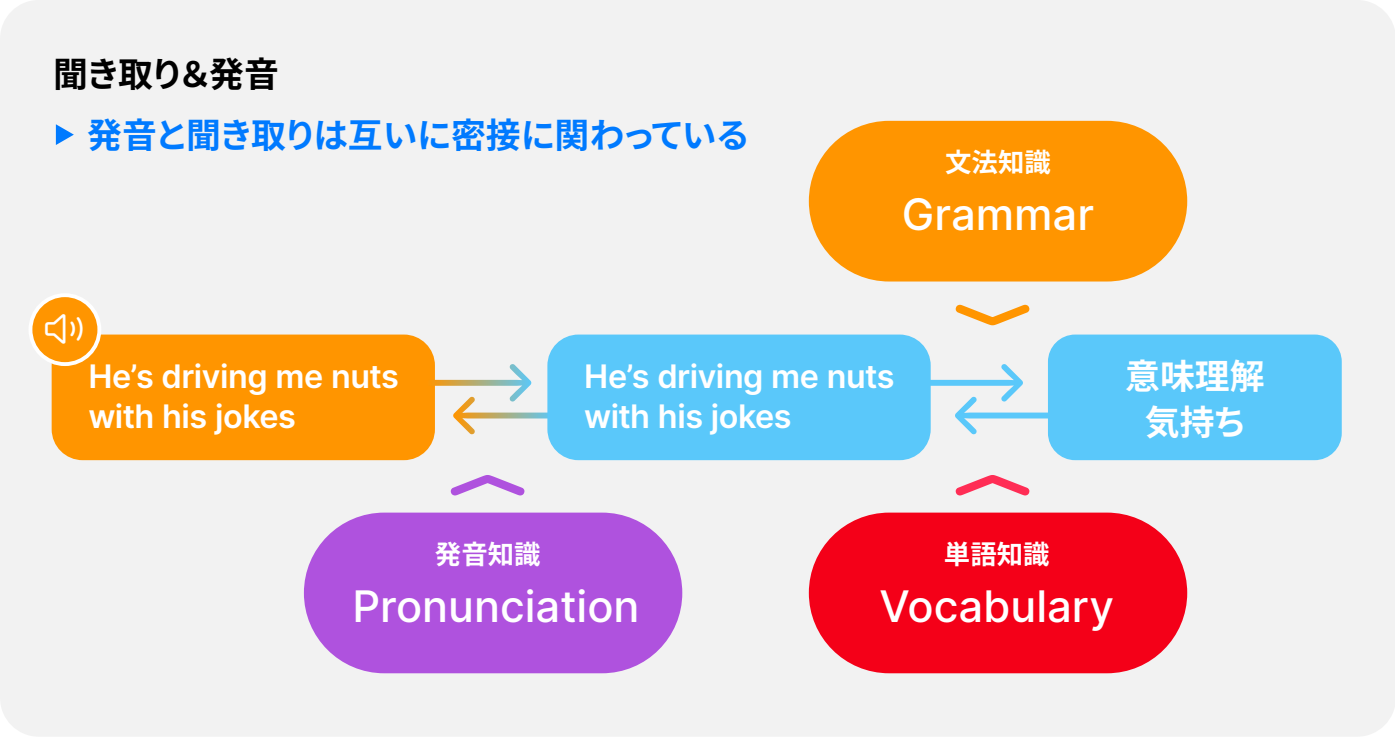
▶ **様々な機会において様々な文章を作ることで自分の気持ち、感覚と作成する文章をマッチさせて、パターンを蓄積していく。**



―3.5.4 「感覚」を心の中にイメージして何度も言ってみる

自分の言いたいことや感覚を始点にして英文を作成できたら、次はその気持ちや感覚を心の中に強くイメージして何度も言ってみてください。その時はしっかりとその英文を言う状況や情景も想像して、気持ちを込めて言うことが重要です。この作業によって自分の気持ちとその時に使う英文法や英単語がマッチし、アウトプットの速度がドンドン速くなります。

最初は練習の中で適切な単語はこれで、適切な文法はこれで、これらを組み合わせるとこういう意味の文章になる、という意識的なステップを踏みますが、実際の会話や議論でこれをしていては、時間がかかりすぎてコミュニケーションが成立しません。「自分の言いたいこと→適切な英単語と英文法の組み合わせによる英文作成」という流れを瞬時に行うには、普段から意識的に感覚や情景をイメージした状態でのアウトプットを繰り返し行うことで、このプロセスを無意識化していきましょう。



3.6 聞き取り能力と発音能力

ここからは、「聞き取り」と「発音」の2 つの能力についてお話していきます。上の図を見てください。上の図は、聞き取りが必要になるリスニングと、発音が必要になるスピーキングのプロセスを重ね合わせた図です。ここから分かることは、この2つの技能のプロセスは相互に鏡写しの状態で発生しており、聞き取りと発音で必要となる知識は、「発音知識」であるということです。つまり、発音知識の土台さえしっかり築いていれば、基本的には意味が分かるかどうかは別として聞き取れますし、文章を理解されるのに十分なレベルで発音することもできるわけです。さて、ここで聞き取りと発音の重要な関係についてお話します。それは「発音できるものは聞き取れるが、聞き取れるからといって発音できるわけではない」ということです。これは、意外と見逃しがちな観点です。例えば、Take it easy（気楽にやりなよ）という文章は発音記号通りにいけば /teɪk ɪt iːzi/ ですが、実際にはよく /ˈteɪkɪ ˈdiːzi/ のように聞こえます。take と it 、it と easy は連結し、it の t は柔らかい /d/ のような音に聞こえます（Flap t）。これは、普段から発音知識をもとに自分が /ˈteɪkɪ ˈdiːzi/ と発音していれば、絶対に聞いたときにその音が “take it easy” であると分かります。しかし、聞いた時にこれが “take it easy” のことだと認識できたからといって、その発音で自分が言えるわけではありません。なぜなら、発音するという作業は聞く作業と違い能動的であり、「実際にどのように口や舌を動かし、どこから音を出すべきか」ということについて、身体で覚えていなければ発音できないからです。このように、聞き取り能力を高めようと考えた時にとにかくリスニングの練習をしたくなるものですが、実際には自分の発音を磨くというアプローチもリスニング力の向上に大変効果的です。

聞き取り&発音

▶ **発音と聞き取りは互いに密接に関わっている**

―3.6.1　聞き取り能力と発音能力を高める方法

同じ発音知識を要する「聞き取り」と「発音」の能力ですが、発音知識を伸ばすことによるポジティブな影響は、聞き取りの能力にまで波及するというお話をしました。ここから、聞き取りと発音の能力を高める方法を導くことが出来ます。それは以下の3つのステップから構成されます。

1. 発音知識を習得し、自分のスピーキングに落とし込む
2. 精聴により自分が聞き取れない部分の識別、原因分析、解決を行う
3. 精聴によって得た新しい知識を自分のスピーキングに落とし込む

―3.6.2　発音知識を習得し、自分のスピーキングに落とし込む

最初のステップは、必要となる発音知識を習得し、それを普段の自分のスピーキングの中に取り入れていく作業です。この時の発音知識というのは、発音記号（音素と異音）や強勢、イントネーション、音の繋がりといった発音全般の知識を意味しています。これらに関してはAtsueigoの「発音マスタークラス」や、その他体系的に知識をまとめた発音学習本を使って短期間で習得することができます。これらの知識が頭にインストールされていない状態でいくら聞き取り、そして発音の練習をしたとしても、その成長は限定的です。まずは短期間で効率よく知識を習得しましょう。知識を習得した後はそこで満足せず、その知識を意識的に自分のスピーキングに落とし込み、自分の発音を向上していきます。そうすることで、自分の英語が相手に伝わりやすくなるだけでなく、自分の発音が英語話者の発音に近づき、英語がより聞き取りやすくなります。

―3.6.3 聞き取れない部分の識別・原因分析・解決

次はリスニングの精聴によって聞き取れない部分の識別、原因分析、解決を行うことにより、聞き取り能力を高めていきます。具体的なステップとしては

1. 聞いた英語の中で聞き取れない部分を識別する
2. 聞き取れない原因を追究する（単語の正しい発音を知らないのか、音が変化・脱落しているせいで聞き取れていないのか）
3. 単語の正しい発音を知らないのであれば発音記号を確認し覚え、音が変化・脱落が原因であれば該当の法則を確認し、理解し、覚える
4. 再度聞き取れなかった英文を新たに得た知識をもとに聞き取れるか確認する

という4つのステップで行います。

この4つのステップのうち、2つ目の「聞き取れない原因を追究」には網羅的な発音知識が必ず必要になってきます。特に音が変化・脱落しているせいで聞き取れていない場合はその法則を知らないと、「なんとなくこんな感じで音が変わるものなのかなぁ」といったあいまいな理解で終わってしまい、論理的な問題解決ができません。しっかりと発音知識を習得してから、問題の識別、原因分析、解決を行いましょう。

また、この4ステップはリスニングの中でも「聞き取る」能力を高めるためのものです。よって、聞き取れているにもかかわらず意味が分からない場合には、3.4.2で紹介した以下の4つのステップで「意味取り」の能力を向上させる必要があります。

1.) 英文の中で意味の分からない部分を識別する
2.) 意味の分からない原因を追究する（単語、文法、またはその両方）
3.) 単語であれば単語の意味を、文法であれば文法の仕組みを理解し、暗記する
4.) 再度新たに得た知識をもとに文章を理解する

リスニングは「聞き取り」と「意味取り」の二つの能力から成っているため、自分のリスニング力における問題がどちらの能力に起因するかを常に考え、最適な学習を行いましょう。

―3.6.2 発音知識を習得し、自分のスピーキングに落とし込む

最後に、精聴の4ステップによって得た新しい知識を、自分のスピーキングに落とし込み、普段から使用するように心がけます。精聴時に聞き取れなかったということは、それは同時にスピーキング時にも正しく発音できていない可能性があります。なぜなら、先ほど申し上げたように、「発音できるものは聞き取れる」はずだからです。よって、聞き取れない原因が分かったら、そこで得られた知識を使って自分の発音も改善するよう意識しましょう。

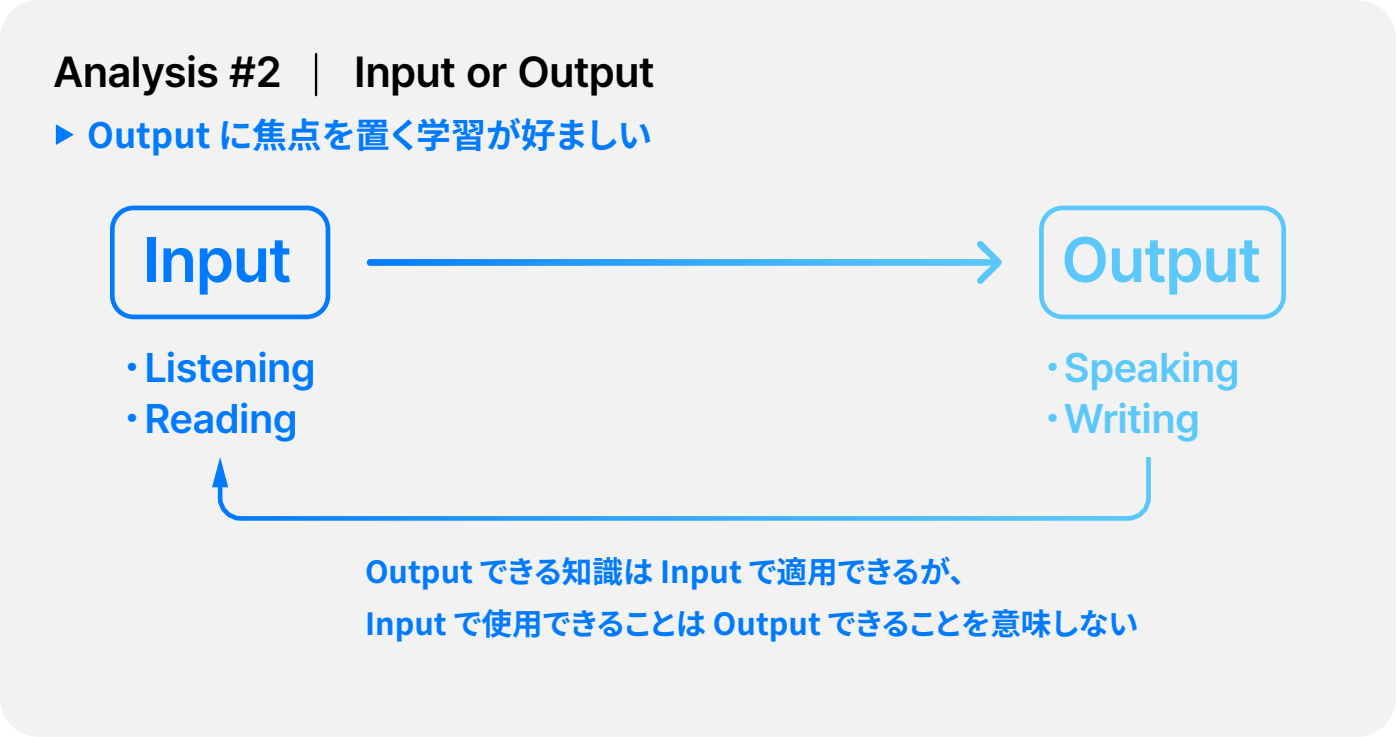
Chapter 04

English Intelligence を高める ―最高の英語学習方法を求めて: 分析と考察

ここまで、本書ではEnglish Intelligence、つまり「英語学習において直面した問題に対して、自らが現状を分析し、論理的に解を導き、実行することで英語学習を効果的かつ効率的に進めるスキル」を高めるために、英語は英単語、英文法、発音という3つの知識を運用することにより成立し、その運用過程では意味取り、文章構築、聞き取り、発音という4つの能力が必要となることを理解しました。もうこの段階で、みなさんの英語学習過程に発生する問題を解決するスキルは、各段に向上しているはずです。本章からは、ここまでで築いたEnglish Intelligenceをベースに、4技能の更なる分析・考察を行い、英語学習全体における戦略、方向性を導いていこうと思います。英語学習全体の中で、何に焦点を置いて学習を進めることが、英語学習を効果的かつ効率的に進める上で最適なのか、考えていきましょう。

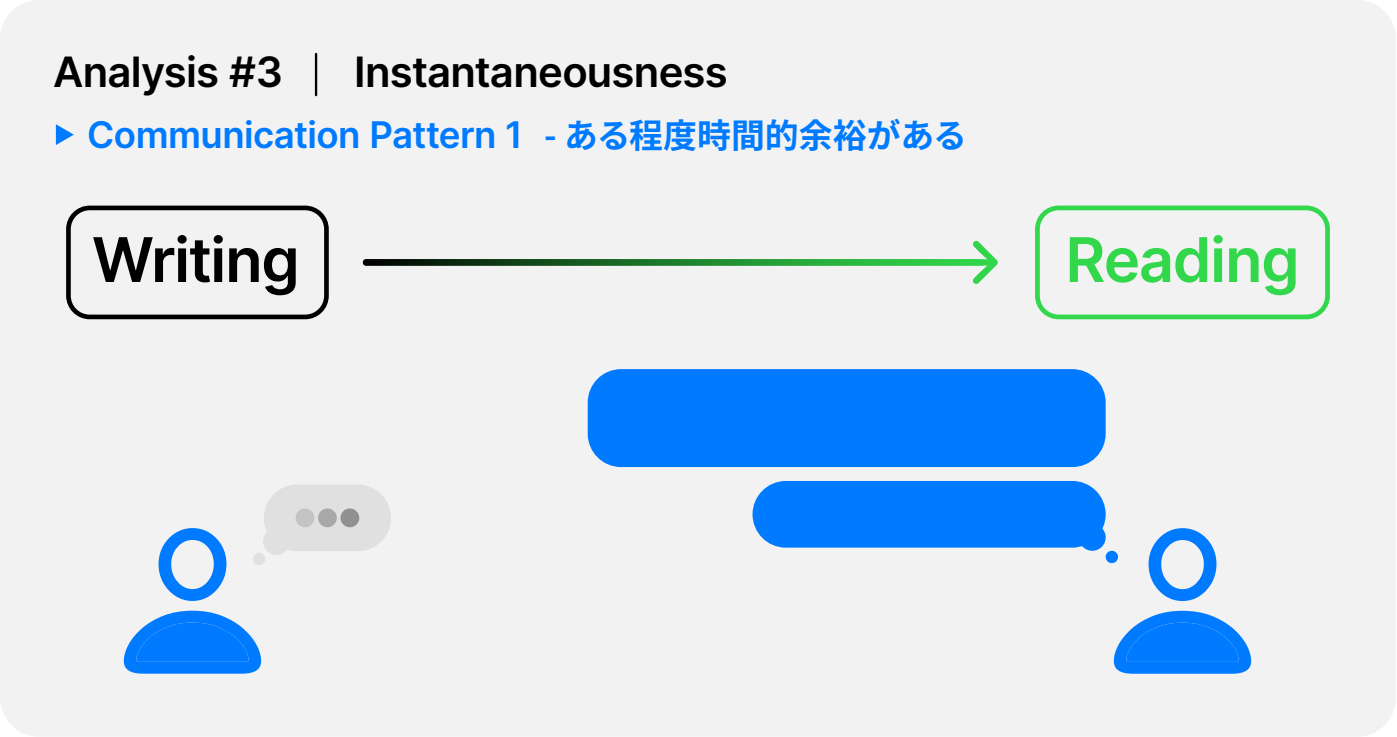
4.1 必要知識による分析

まずは4技能を発揮する上で必要となる知識による分析から始めましょう。リーディングとライティングは英文が音という形に変換される必要がないため、必要知識は単語知識と文法知識のみです。英文を読解する上で発音に関する知識は必要ありませんし、文章を構築して書き出すという作業にも発音知識は不要です。一方で、スピーキングとリスニングには発音知識が必要です。構築した文章を口からアウトプットする際には適切な発音記号や音の変化の法則を適用し発音する必要がありますし、リスニングの場合も正しい音に関する理解がない限り、聞いた英文がどのような単語で構成されているものなのか、理解することができません。つまり、スピーキングとリスニングは、リーディングとライティングと比較して、必要となる知識タイプの数が1つ多いわけですから、リーディングとライティングのスキルを向上したところで、スピーキングとリスニングの能力への貢献は限定的と言えます。これは、日本の英語学習者がリスニングとスピーキングに弱いという現状からも感覚的に理解できると思います。ここから、一つの方向性が見えてきます。それは、英語学習において、常に単語、文法、発音という3つの知識を使用しながら進めるべきであるということです。当たり前のように感じるかもしれませんが、実際英語学習を進める中で、これをしっかりと理解し、実行している方は多くないのではないでしょうか。3つの知識を常に使うことを意識することで、4技能全体をカバーできるように学習をデザインしましょう。



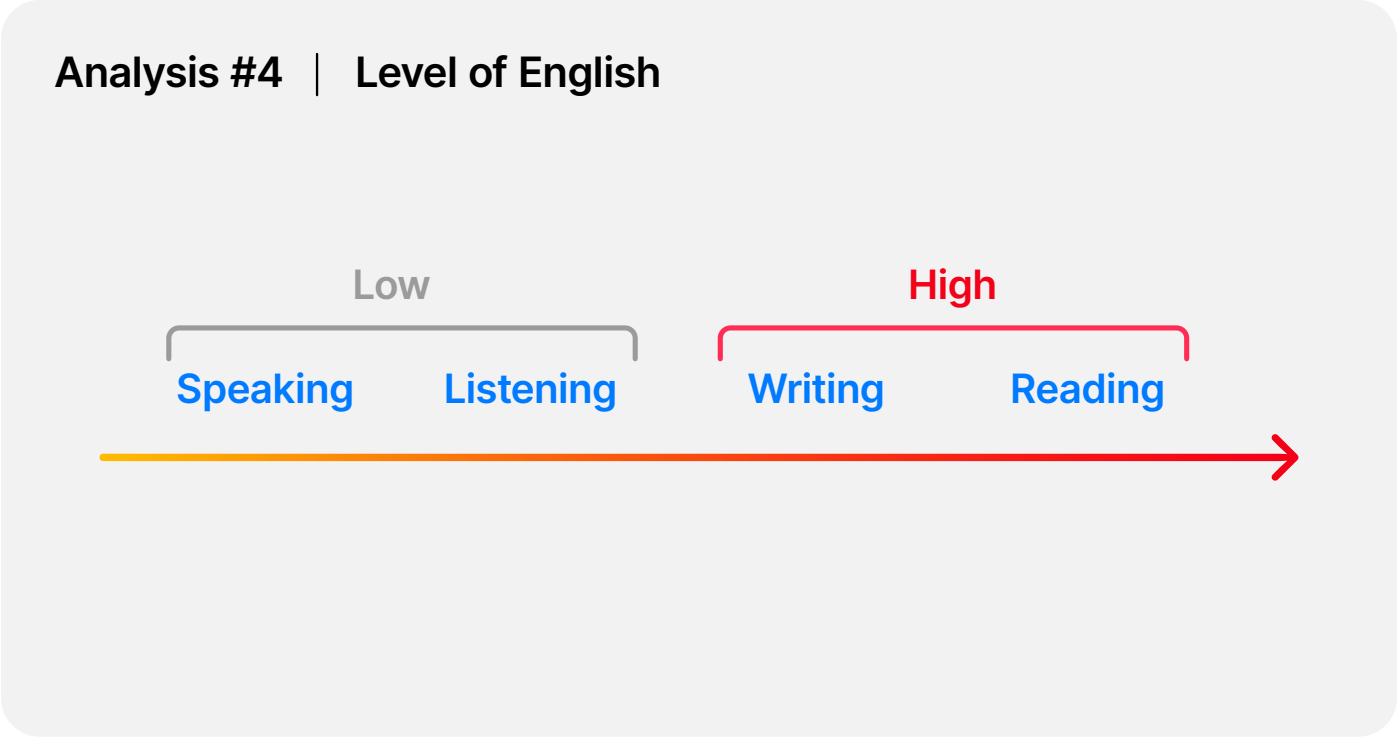
4.2 インプットとアウトプットによる分析

次に、4技能をインプットとアウトプットの観点から分析していきましょう。4技能のうち、リーディングとリスニングは入ってきた英語情報を処理するインプットである一方、スピーキングとライティングは自らが英語で文章を構築しそれを外部に伝達するアウトプットです。多くの学習者がインプットに多くの時間を割く傾向にあります（これは知識を頭に入れることを意味するインプットではなく、技能の特性としてのインプットであることに注意してください）。しかし、残念ながらいくらインプット、つまりリーディングとリスニングの学習を続けたところで、アウトプットが出来るようにはなりません。TOEICのリスニングとリーディングが満点でも、実際に話したり書いたりすると中学英語レベルで精一杯というようなケースも少なくないのです。一方で、アウトプットが出来る場合はインプットもできる可能性が高いです。例えば、自分が普段から英語を話すときに使っている文章構造や表現がリスニングで出てきたとき、スッと理解することができますよね。普段からライティングで書いている英文は、リーディングで登場したときもスムーズに理解できるはずです。つまり、英語学習において、アウトプットに焦点を置いて学習をした方が、英語学習全体を見た時に効果的だと考えられます。もちろん、インプットの学習が必要ないと言っているわけではありません。あくまで欠落しがちな「アウトプット」の学習に焦点を当てながら、英語学習を進めることが重要であるということです。



4.3 瞬発力による分析

次に、瞬発力による分析を行っていきましょう。瞬発力というのは、4技能を使う際のスピードを意味します。言い換えると、瞬間的に行う必要があるのか、それとも時間的余裕をもって行うことが出来るのか、ということです。ライティングとリーディングのコミュニケーションでは、語り手が伝達したい内容を頭の中で構築し、英文として書き出し、それを読み手に伝達し、読み手側はそこに書かれた英文を読み理解するという流れで行われるため、テンポの良いキャッチボールは必要なく、ある程度時間的に余裕をもったコミュニケーションです。一方で、スピーキングとリスニングのコミュニケーションでは、話者が発した情報が瞬時に聞き手に伝わり、聞き手がそれに対して瞬時に自らの意見を相手に返すため、より高次元の瞬発力が要求されます。それゆえ、リーディングとライティングによるコミュニケーションよりも、リスニングとスピーキングによるコミュニケーションに焦点を置く方が、英語力で必要とされる瞬発力を伸ばす上で効果的であることが分かります。



4.4 英語レベルによる分析

最後に、必要となる英語レベル、つまり使われる単語や文構造の難易度の観点から4技能を分析してみましょう。これはあくまで傾向の話ですが、スピーキングとリスニングの領域で必要とされる英語レベルは、ライティングとリーディングのそれと比べると平易と言えます。これは、日本語によるコミュニケーションでも同様のことが言えますが、何度もコミュニケーションのキャッチボールをすることを前提としている会話は、その場で言い直したり、冗長になったりしてもあまり気にならないため、結果として一文一文の文構造や使われる単語が簡単でシンプルになりやすいです。一方、ライティングは一回のコミュニケーション（つまり書き手から読み手への1回の情報伝達）で効率的に情報を伝えることを目指すため、各英文の内容はより無駄なく正確な文章にする必要があります。その結果、英文で使われる単語の難易度が上がったり、多くの情報を一文に詰め込むために文構造が複雑になったりする傾向にあります。そして、一文の情報量が多いため、同じ情報量を伝えるために必要となる文（センテンス）の数は少なくなります。もちろん、スピーキングでも国際会議における議論やフォーマルなスピーチでと普段の日常会話では異なりますし、一概に言えないことは確かです。ただし、あくまで傾向としては、ライティングとリーディングで必要となる英語レベルの方が高くなります。

Overall Analysis

4 Skills	Pronunciation 発音知識	Output アウトプット	Instantaneousness 瞬発力	High Level 高い英語レベル	Total
Reading				●	1
Listening	●		●		2
Speaking	●	●	●		3
Writing		●		●	2

▶ **Speaking が一番多くのタイプの Skill を必要とする**

▶ **Speaking 学習を基軸とした学習は合理的か?**

4.5 分析結果の考察 —4.5.1 導かれる仮説

ここまで、必要知識のタイプ、インプットとアウトプット、瞬発力、そして英語レベルの 4つの観点から英語の4技能を分析してきました。そしてその結果をまとめたものが上のマトリックスです。これを見ると、スピーキングは

1. 発音知識が必要である
2. アウトプット学習である
3. 瞬発力を必要とする

という3つの項目に該当し、4技能の中で一番多くのタイプのスキルが必要となることが見て取れると思います。そしてこれを考えると、スピーキングを基軸とした学習を行えば、発音、アウトプット、瞬発力の3つを同時に鍛えることができ、その効果が他技能にも大きく波及するという仮説を立てることが出来ます。もちろん、これらの分析は数値化・定量化に基づいておらず、定性的な側面がかなり強いため、これだけで英語学習の方向性を結論付けることはできません。そこで、私の経験をベースとして、そのスピーキングを基軸とした英語学習が最も好ましいという仮説の妥当性について考えていこうと思います。

—4.5.2　筆者の経験をベースとした仮説の検証

スピーキングを基軸とした英語学習は、本当に英語学習の方向性として正しいのか、その妥当性を私の経験をベースに考えていこうと思います。私は高校2年生の終わりに英語学習を開始し、そこから高校を卒業するまでの約1年間はリーディングに焦点を当て、いわゆる受験英語対策的な英語学習を行っていました。そして大学生になり、より実践的な英語力を身につけたいと考え、とにかく自分の知識をスピーキングでアウトプットすることにフォーカスするようになりました。例えば、単語を覚えるときも必ずその単語を使用した英文を口から出したり、英文法も知識を習得したらすぐに英文を作って口から出したり、まずは基礎学習の時点から知識をアクティブに使えるようになることを心がけました。また、オンライン英会話と英語での独り言を毎日行い、アウトプットの機会を日々設けていました。これを約1年間行った結果、私の英語はスピーキング能力が高まっただけでなく、それ以外の技能も驚くほど向上したのです。最初に効果を感じたのはリスニングです。スピーキング能力を高めるために発音と音の変化の法則についての知識を高め、それを自分の英語に落とし込んで毎日スピーキングしていたおかげで、英語を聞いた時に音が変化したり脱落したりしても、普段から自分が話している英語に音が近いため、それを瞬時に聞き取れるようになっていたのです。そして、次にライティングに大きな影響がありました。毎日スピーキングを基軸に行っていたため、文章を瞬間的に作成する能力が急速に伸びていました。そのおかげで、英作文の際は自分が普段英語を話している感覚で、サクサクとテンポよく英文を書くことが出来るようになっていま

した。そのおかげで、私はライティングの勉強といえば、イントロやボディといったスタイルに関する学習をするだけで、劇的にライティング力を伸ばすことができました。読解も自分が話す感覚で読めるようになったことで、処理速度の向上につながったと感じています。

英語学習の全体戦略像

❶ 文法、単語、発音の知識を確立する

文法&発音知識は短期間で仕上げ、単語は継続的

❷ 基礎知識をベースとした、スピーキングに軸を置いた学習の遂行

他の技能の学習をしないのではなく、どの英語学習においてもどうアウトプットに繋げるか意識して学習するということ

4.6 導かれる最高の英語学習戦略とは

ここまでで行った4技能分析の結果と、自らの英語学習経験を考慮し、私は英語学習における最適な方向性は、英語を構成する3つの知識である単語知識、文法知識、発音知識の基礎を築き上げ、それをベースにスピーキングを基軸として学習を進めていくことであるという結論に達しました。もちろん、これはスピーキングの学習だけを行い、他の技能を伸ばすための学習をしないというわけではありません。ただ、単語を覚えるときに自分が英語を話す中で使うならどう使うかを考えたり、リーディング学習で面白い表現があれば切り取って自分のスピーキングで使って見たり、リスニングで学んだ音の知識をすぐに自分の発音に適用したりと、最終的な英語学習の指針が必ずスピーキングに向くように強く意識しながら学習を進めると、長期的に見た時に英語力を最も効率的・効果的に伸ばせる可能性があることは、良く理解できたのではないでしょうか。

あとがき

最後まで本書を読み進めていただき、どうもありがとうございました。理論的な話を多く含む内容のため、読了には多くのエネルギーが必要だったことでしょう。一度、ゆっくり休んで、頭をリフレッシュしてから、また英語学習に取り組んでください。本書で公開した内容は、すべて私が長年の英語学習を通じて重ねてきた知識と経験をもとに論理的に導いた英語学習における思考プロセスであり、英語学習における思考フレームワークとして位置付けているものです。もちろん、これはあくまで私の使用しているフレームワークであり、これが絶対的に正しいとは考えていません。とにかく重要なのは、一人一人が英語学習の最適化を自らの頭で考え、実践していくことです。今回ご紹介したものは、それを手助けする思考の枠組みであると考えてください。多くの英語学習者が他人の意見を盲目的に信じ、真似をし、結果が出ずにまた他の人の意見を求めるということを繰り返します。しかし、そうした思考を欠いた他者に依存した学習スタイルは、非効率です。本書を読んだみなさんには、自ら思考し、解決策を導ける学習スタイルに移行し、効率的に最大限の効果を実現してほしいと強く想います。

また、英語の本質と学習戦略をロジカルに理解するだけでは、英語力は向上しません。Chapter 1.2でもお話しましたが、良質な英語教材を手に入れて、正しい学習戦略や学習法を理解しても、それを何か月、何年と意識的に継続的に実践しなければ、英語力は向上しません。最初は1、2か月といった短期間でも良いので、とにかくコツコツと学習を続けてみてください。短期間であっても、論理的な学習法を用いた継続学習を達成できれば、必ず成長を実感することができます。この成長が自信につながり、さらに学びたいという意欲にもつながるはずです。こうしたポジティブな学習サイクルをつくりながら、中長期的な学習へと発展させていきましょう。

もちろん、このように言うのは簡単ですが、実際に学習を継続することが簡単ではないことも理解しています。私もこれまで動画や記事を通して色々と学習のロードマップを示してきましたが、この「継続学習」が大きな障壁となり、学習をあきらめてしまう人にもたくさん出会ってきました。今後は学習法やコンテンツだけではなく、どこかで学習を継続できるような環境も提供できるよう、私も努力していきたいと思います。

本書が少しでもみなさんの英語学習プロセスの最適化に役立ち、英語力の向上に寄与できれば幸甚に存じます。最後まで読んでくださりありがとうございました。